久留米市文化財調査報告書　第 445 集

早津崎五反田遺跡

－ 第１次発掘調査報告 －

令和５（２０２３）年３月
久留米市教育委員会

早津崎五反田遺跡

－ 第１次発掘調査報告 －

令和５（２０２３）年３月

久留米市教育委員会

序

久留米市は、令和２年度に「久留米市文化財保存活用地域計画」を策定し、令和３年７月に国による認定を受けることができました。この計画では、文化財を国県市の指定に関わらず「歴史遺産」として広く捉え、これを将来にわたって「見つけ守り、活かし伝える」方針を定めました。歴史遺産は、私たちの郷土に暮らす人々が古い時代から現代まで積み重ねてきた文化を体現するものです。この貴重な歴史遺産を次世代へ継承するため、本市では継続的な保存・管理を図るとともに、市民が身近な歴史文化にふれ、地域と自己のつながりを認識できる機会を提供することで郷土愛を醸成し、さらには学校・社会教育や地域振興、観光振興など、久留米の新たな魅力の創出につながる歴史文化のまちづくりを進めています。

本書で報告する早津崎五反田遺跡も大切な歴史遺産の一つで、宅地造成に先立つ発掘調査として、令和３年度に実施したものです。発掘調査では縄文時代から平安時代までの遺構と遺物が出土し、貴重な成果を挙げることができました。

今回の発掘調査とその成果を収録した本書の発行によって、地域の歴史解明、さらに文化財保護の理解や普及等に多少なりとも貢献すると同時に、なにより本市の魅力の創出につながれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和５年３月 31 日

久 留 米 市 教 育 委 員 会

教 育 長　井　上　謙　介

例　言

1．本書は、宅地造成に先立ち、ワウ九州ホールディングス株式会社の委託を受けて実施した早津崎五反田遺跡第１次調査の発掘調査報告書である。

2．本調査は久留米市教育委員会が主体となり、久留米市市民文化部文化財保護課の江頭俊介が担当した。

3．本書に掲載した遺構実測図の作成は、江頭が行った。また、遺物の実測は、当課の廣木誠・小川原励、会計年度任用職員の宮﨑彩香・今村理恵・江口里織・山元博子が行い、浄書は廣木・宮﨑・今村・山元・横井理絵が実施した。なお、遺構実測図のうち、石蓋土壙墓実測図、甕棺墓実測図、遺物出土状況図および土層図は江頭が写真測量を行い、その他の図面は廣木が株式会社 CUBIC 製ソフト「遺構くん cubic」で作成した。

4．本書に掲載した遺構写真は江頭が Canon EOS 6D を使用し撮影した。全景写真は有限会社空中写真企画に委託し撮影した。また、遺物写真は廣木が PENTAX K-1 Mark Ⅱを用いて撮影した。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。

5．本書に使用した遺構の略記号は、ＳＤ - 溝、ＳＫ - 土坑、ＳＴ - 墳墓を示す。

6．遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面方位は座標北を示す。なお、平成 28 年に発生した熊本地震に係るパラメータ補正は行っていない。

7．本調査の略記号はＨＺＧ - 001、調査番号は 202113 である。

8．遺物観察表の凡例は下記のとおりである。

　口径（長）・底径（幅）・器高（厚）の単位は cm である。(　) 内の数値は現存値を、〔　〕内の数値は復元値を示す。

　色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1997 年版）による。

　胎土は 0.5mm 未満を微砂粒、１mm未満を細砂粒、２mm 未満を粗砂粒、５mm未満を細礫、５mm 以上を礫とした。

　登録番号は、久留米市市民文化部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

（例）２０２１１３　－　０００００１
　　　調査番号　　　　　登録番号

9．本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。

10．本書の執筆・編集は、廣木が行った。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに …… 1
ⅰ．調査に至る経緯 …… 1
ⅱ．調査・報告書作成に係わる体制 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 4
ⅰ．調査の目的と経過 …… 4
ⅱ．検出遺構 …… 4
ⅲ．出土遺物 …… 17
Ⅳ．総括 …… 29
報告書抄録 …… 巻末

挿 図 目 次

第１図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）…… 2
第２図　調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）…… 3
第３図　早津崎五反田遺跡第１次調査遺構配置図（1/200）…… 折込
第４図　ＳＤ４・36・42 実測図（ＳＤ４：1/60、その他：1/40）…… 6
第５図　ＳＫ１・３・21・30・46・53 実測図（1/40）…… 7
第６図　ＳＫ54・55・56・57・58 実測図（ＳＫ58：1/60、その他：1/40）…… 9
第７図　ＳＫ65・76 実測図（1/40）…… 10
第８図　ＳＴ44・45・52 実測図（1/40）…… 11
第９図　ＳＴ66 実測図（1/30）…… 13
第10図　ＳＴ47・48・49・50 実測図（1/20）…… 14
第11図　ＳＴ51・67・72・74・75 実測図（1/20）…… 16
第12図　ＳＤ４・42 出土遺物実測図（15・16・17：1/2、その他：1/4）…… 18
第13図　ＳＫ１・３・21・30・46・53・54 出土遺物実測図（1/4）…… 19
第14図　ＳＫ57 出土遺物実測図（1/4）…… 20
第15図　ＳＫ57・58 出土遺物実測図（58・59：1/8、その他：1/4）…… 21
第16図　ＳＫ58 出土遺物実測図（1/4）…… 22
第17図　ＳＫ58・65、ＳＴ45 出土遺物実測図（71〜76、83〜95：1/2、その他：1/4）…… 23
第18図　ＳＴ47〜49 出土遺物実測図（1/8）…… 24
第19図　ＳＴ50・51・67・72 出土遺物実測図（1/8）…… 25

第20図　ＳＴ74・75出土遺物実測図（1/8）……………………………………………………………… 26

表目次

第１表　出土遺物観察表①…………………………………………………………………………………… 26
第２表　出土遺物観察表②…………………………………………………………………………………… 27
第３表　出土遺物観察表③…………………………………………………………………………………… 28
第４表　出土遺物観察表④…………………………………………………………………………………… 29
第５表　弥生時代墳墓一覧表………………………………………………………………………………… 30

図版目次

図版１（１）調査地より高三潴地区を望む（東上空から）
（２）東区全景（北東上空から）
図版２（１）西区全景（南東上空から）
（２）ＳＤ４礫群検出状況（北から）
（３）ＳＤ４完掘状況（北から）
（４）ＳＤ36完掘状況（南東から）
（５）ＳＤ42完掘状況（南から）
図版３（１）ＳＫ１完掘状況（南西から）
（２）ＳＫ46完掘状況（南東から）
（３）ＳＫ53完掘状況（北東から）
（４）ＳＫ54完掘状況（北から）
（５）ＳＫ57遺物出土状況（南西から）
（６）ＳＫ57完掘状況（東から）
（７）ＳＫ58遺物出土状況（東から）
（８）ＳＫ58完掘状況（北から）
図版４（１）ＳＫ76完掘状況（北から）
（２）ＳＴ44完掘状況（南から）
（３）ＳＴ52完掘状況（北から）
（４）ＳＴ45遺物出土状況（北西から）
（５）ＳＴ45完掘状況（南西から）
（６）ＳＴ66石蓋検出状況（北東から）
（７）ＳＴ66完掘状況（南東から）
（８）ＳＴ66赤色物検出状況（東から）
図版５（１）ＳＴ47甕棺検出状況（西から）
（２）ＳＴ48・49甕棺検出状況（南東から）
（３）ＳＴ49石棺検出状況（南から）
（４）ＳＴ50・67甕棺検出状況（東から）
（５）ＳＴ51甕棺検出状況（北西から）
（６）ＳＴ72甕棺検出状況（北西から）
（７）ＳＴ74甕棺検出状況（北西から）
（８）ＳＴ75甕棺検出状況（南東から）
図版６　出土遺物①
図版７　出土遺物②
図版８　出土遺物③
図版９　出土遺物④
図版10　出土遺物⑤
図版11　出土遺物⑥
図版12　出土遺物⑦
図版13　出土遺物⑧
図版14　出土遺物⑨
図版15　出土遺物⑩
図版16　出土遺物⑪

Ⅰ. はじめに

ⅰ. 調査に至る経緯

本調査は、宅地造成に先立つ調査である。令和3年3月22日、土地所有者より久留米市三潴町早津崎字五反田1006番1、1008番、1009番、1010番2における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。一帯は周知の遺跡である早津崎五反田遺跡に含まれ、弥生時代以降の遺構が展開していることが想定されたため、令和3年6月10日に確認調査を行った。結果、溝・土坑等の遺構を確認し、発掘調査が必要である旨を回答した。その後、協議を重ね、調査費用を原因者負担とすること、発掘調査を令和3年度、報告書作成を令和4年度に実施することで合意に至った。協議結果を受け、令和3年9月14日にワウ九州ホールディングス株式会社から「発掘調査の依頼」が提出され、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、令和3年10月26日に依頼者と久留米市は「早津崎五反田遺跡における埋蔵文化財に関する協定書」および「令和3年度埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。調査期間は、令和3年11月1日から令和4年1月17日までである。また、出土品整理・報告書作成作業は令和4年5月31日に「埋蔵文化財発掘調査報告書作成業務委託契約書」を取り交わし、実施した。報告書作成期間は令和4年6月1日から令和5年3月31日までである。

ⅱ. 調査・報告書作成に係わる体制

調査委託：	ワウ九州ホールディングス株式会社	代表取締役	寺園 公教
調査主体：	久留米市教育委員会	教育長：	井上 謙介
調査総括：	市民文化部	部長：	竹村 政高
		次長：	深堀 尚子
	文化財保護課	課長：	水島 秀雄
		課長補佐：	久保田 由美（令和3年度）
			田中 健二（令和4年度）
		主査：	水原 道範（令和3年度）
			小澤 太郎（令和4年度）
		事務主査：	小澤 太郎（令和3年度）
			江島 伸彦
		調査担当：	江頭 俊介
		整理担当：	廣木 誠、宮﨑 彩香、今村 理恵

会計年度任用職員

発掘調査　秋永 絹子、岩橋 彦左衛門、太江田 博子、川島 絵津子、川原 初美、黒岩 秀則
小林 伸一郎、髙﨑 佳枝、田中 とし子、中村 麻衣、永田 徹、廣田 淳、松尾 朱美
松本 金一、箕浦 イルマ・グラシエラ 佳子、溝口 輝男、山﨑 秀雄（令和3年度）

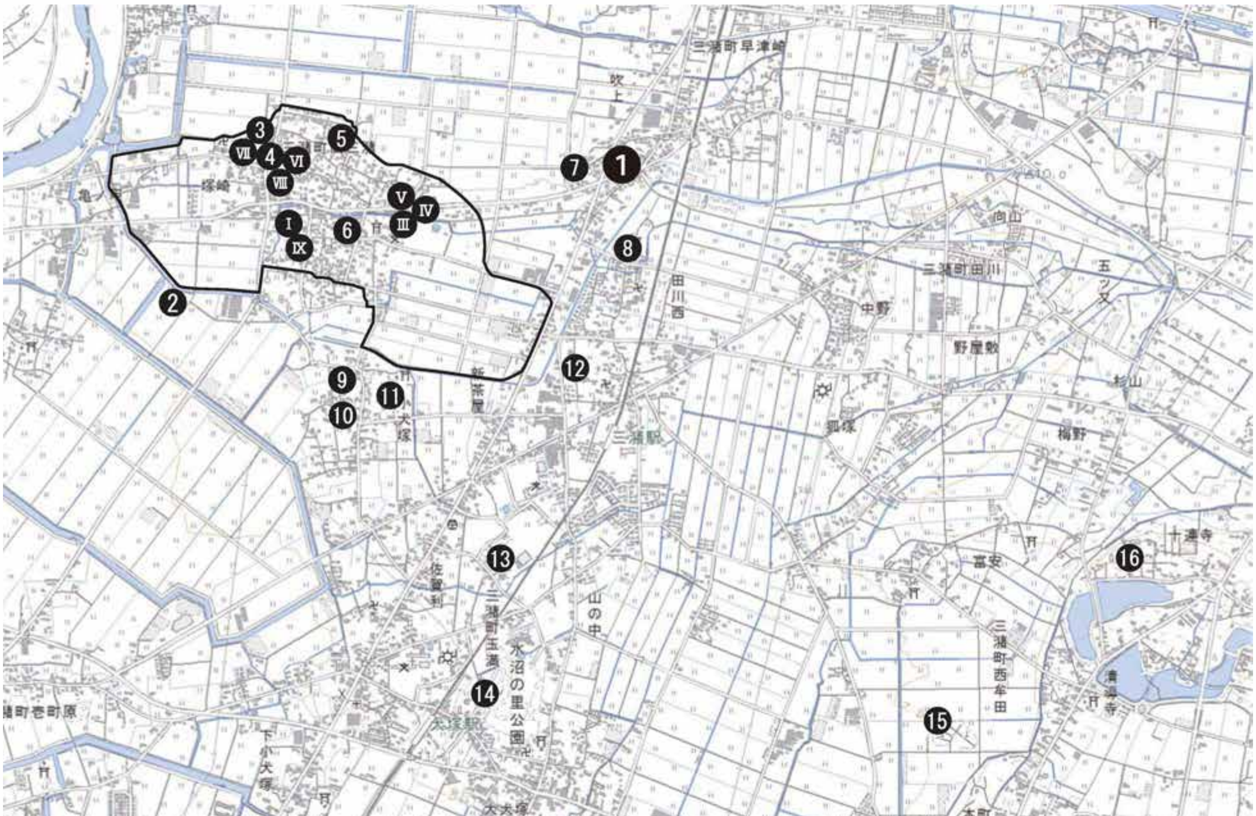
整理作業　椛島 かおり（令和3年度）田中 千佐子、山口 久美子（令和4年度）

Ⅱ．　位置と環境

久留米市は九州の北部、福岡県のほぼ中央に位置する。東西32km、南北16kmの東西に長い市域で、九州一の大河筑後川の中・下流域に沿うように広がる。早津崎五反田遺跡が所在する三潴町は、市域の南西部、筑後川左岸にあたる。 三潴町の北西は筑後川を境とし、対岸は佐賀県三養基郡みやき町に、北東は久留米市大善寺町に、南は筑後市ならびに大木町に、西は久留米市城島町に接する。

三潴町の北部を広川が、南部を山ノ井川が西流して筑後川に合流し、町域の東部には八女丘陵から西に派生した標高20m程度の西牟田丘陵を有す。これらの丘陵と河川に抱かれた町域中央部から西部にかけては沖積地が広がるとともに、微高地が点在している。本遺跡は町域の中央部に南北にのびる微高地上に立地しており、 標高約9mを測る。

三潴町の遺跡の分布については、 平成15・16年度に遺跡等詳細分布調査を行い、 集落17、円墳20（消滅含む。）、館跡2、 城跡4、 墓地2、 土塁1、 散布地66等が把握されている。これらの大半は沖積地内の微高地とその周囲および西牟田丘陵上に立地し、現在の居住域とも重複することから、現代までの生活が脈々と継承されてきたといえる。近年、町内における発掘調査の事例が増加し、弥生時代を中心に目覚ましい成果を挙げており、以下、発掘調査の成果を中心に概観する。



1. **早津崎五反田遺跡第１次調査地**　2. 高三潴遺跡群（ローマ数字は調査次数）　3. 御廟塚貝塚　4. 塚崎東畑遺跡　5. 烏帽子塚　6. 横溝氏館跡　7. ベキ遺跡　8. 田川館跡　9. 玉満向エ野古墳群　10. 裏畑古墳　11. 犬塚城跡　12. 田川中原遺跡　13. 道手牟田遺跡　14. 玉満松木ソノ遺跡　15. 西牟田清導寺浦遺跡　16. 十連寺古墳

第１図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

町内で人々の活動痕跡が認められるのは、縄文時代からである。高三潴遺跡（第7次調査）では弥生時代の遺構に混入した曽畑式土器が出土し、市内西部で初めて確認された。遺構としては、道手牟田遺跡、田川中原遺跡および西牟田清導寺浦遺跡において落とし穴遺構が検出されている。

続く弥生時代の遺構・遺物は広い範囲で確認されており、特に高三潴遺跡は北部九州の後期初頭の標識土器「高三潴式土器」の名称の由来として著名である。同遺跡の集落に関する遺構は、前期末以降の断面V字形を呈する溝や（第6次調査）、擬朝鮮系無文土器を含む中期初頭の竪穴建物や溝が確認された（第７・８次調査）。また、礎板を伴う後期以降の掘立柱建物（第3次調査）も検出された。墓地に関しては、大量の朱とガラス製の連玉および小玉が出土した後期前半の甕棺墓が注目される（第５次調査）。その他の特殊遺物には、後期前半と考えられる幅4m以上の溝から多量の土器・木製品とともに小銅鐸が出土した（第4次調査）。

高三潴遺跡群の北端に位置する烏帽子塚付近では銅剣2点が、西部に位置する塚崎東畑遺跡では前期末から中期初頭の竪穴建物、中期前半から中頃の甕棺墓が出土した。自然堤防の最高位付近に位置する御廟塚貝塚は、矢野一貞の『筑後将士軍談』の中で墳墓の存在が示され、箱式石棺の棺外に銅剣2点が副葬されていたことを伝える。また、現在でもカキ殻などが散乱する貝塚でもある。

高三潴地区から目を転じると、本遺跡に西接するベキ遺跡では中期から後期初頭の竪穴建物が、西牟田清導寺浦遺跡では松菊里型住居2棟を含む竪穴建物7棟が検出されている。この他、玉満松木ソノ遺跡では朝鮮系無文土器が出土した大型の井戸が確認された。

古墳時代になると、西牟田丘陵沿いに多くの古墳が造営されたようであるが、現在、円墳と推定される十連寺古墳が残る。本遺跡近辺では、玉満地区に裏畑古墳が所在するとともに、玉満向エ野古墳群では円墳2基が確認され、周溝の一部や馬具が出土しており5世紀後半に比定される。この古墳の造営集団として注目されるのが玉満松木ソノ遺跡で、５世紀代の竪穴建物が確認された。

古代の遺構は未検出であるが、中世については高三潴遺跡（第1・5・9次調査）、ベキ遺跡、田川中原遺跡において井戸・溝・土坑等が確認されている。城館跡に関しては、本遺跡の南方に『筑後将士軍談』で「田川村舘跡」として伝えられる田川館が所在するほか、この館の西方、小犬塚天満宮境内一帯には陣掘と伝わる水路が遺存し、150mの方形区画が想定できる犬塚城が残る。また、三潴庄高三潴村に地頭職として赴任した、横溝氏の屋敷跡の推定地が高三潴遺跡群中央部に位置している。

第２図　調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

Ⅲ．　調査の記録

ⅰ．調査の目的と経過

早津崎五反田遺跡は三潴町のほぼ中央に位置する標高8～9m程度の微高地上に営まれた遺跡で、調査地は遺跡の中央南端に位置する。遺跡の内容については、平成15・16年度に実施した遺跡等詳細分布調査で散布地として把握・周知されて以降、試掘確認調査において弥生時代の丹塗土器片を含む土坑を確認しており、祭祀土坑や甕棺墓が埋蔵されていることが期待された。

近隣では、調査事例は少ないものの、本調査地の西側100m程度に位置する早津崎遺跡内のベキ遺跡において昭和63年に調査が実施されている。同遺跡では、弥生時代の竪穴建物・溝・土壙、奈良時代以降の掘立柱建物、鎌倉時代の溝・土坑が検出された。中でも弥生時代後期前葉の竪穴建物は、円形を呈する溝の内側に建物を配する稀有な設営方法を採用しており、注目される。

これらのことから、本調査地には弥生時代の遺構をはじめ、古代・中世の遺構が展開することが予想され、遺構の分布状況を確認することを目的として調査を実施した。

現地調査は令和3年11月1日に対象地内の草刈りから着手した。草刈り後の11月4日に重機を搬入し、東区の表土剥ぎを開始した。11月9日に作業員を投入して遺構検出を行い、15日より遺構掘削を開始した。実測作業、写真撮影は随時行い、12月1日に東区の全景写真を撮影した。撮影後東区検出遺構の補足調査を行うとともに埋め戻しに着手した。12月6日に東区の埋め戻しを終了し、翌日に西区の表土剥ぎに取りかかった。12月9日から遺構検出を行い、翌10日より甕棺墓の検出を開始する。12月15日に西区の全景写真を撮影した後、甕棺墓の写真測量等を実施し、並行して西区の一部埋め戻しを行う。年が明けて1月7日、甕棺墓群の南側へ調査区を拡張し、16日拡張区の調査を完了した。1月17日には埋め戻しおよび機材を撤収し、全ての現地作業を終了した。

ⅱ．検出遺構

調査区は、廃土置き場等を確保する必要があったことから、東と西の2区に分け、調査を行った。また、西区南西端で検出した墳墓の全容を確認することを意図し、調査区の一部を拡張している。なお、遺構番号については通し番号とした。

調査地は、北東から南西へ「く」字状に延びる微高地上の北西端部に位置する。標高は9m前後を図り、周辺地形より一段高く、北側と西側200mには低地が広がる。現況は畑地で、東区の南半および西区は造成により削平を受け、特に拡張区はその影響が著しい。基本層序は、東区と西区の北側が耕作土直下で遺構検出面に至る。一方、各区南側は耕作土下位に床土と間層（灰色土）が認められ、間層下位で遺構検出面に達する。遺構検出面である地山は暗褐色もしくはにぶい橙色を呈し、前者より後者の方が削平の影響が大きい範囲である。遺構検出面までの深さは30～40㎝で、西区南西が50㎝を測る。その標高は、東区北側が9.3～9.5m、東区南側と西区が8.5m前後であった。

主要遺構は、溝3条、土坑13基、土壙墓2基、木棺墓1基、石蓋土壙墓1基、甕棺墓9基を検出した。以下、各遺構について詳述する。

第3図　早津崎五反田遺跡第1次調査遺構配置図（1/200）

溝

ＳＤ４（第4図，図版2）

東区北西で検出した。長軸方位はN‐32°‐Wで、長さ9.6m、幅1.4～2.2mを測る。深さは、a‐a´間が35㎝、b‐b´間が60㎝、c‐c´間が62㎝であり、概ね北から南にかけて比高を減じるが、凹凸が著しい。断面形は、a‐a´間が凸レンズ状の底面から壁面が立ち上がるのに対し、b‐b´間は凹レンズ状の底面を呈する。他方、c‐c´間は略U字状であった。

溝内北部では片岩製の礫が多量に出土した。大半の石材は原位置を留めていないと考えられるが、北壁および東壁に石材を立て壁面に沿うように配置した状況が看取され、a‐a´間の断面形から推定すると西壁沿いにも石材が立てられていた可能性がある。また、埋土内からは混入した弥生土器のほか、土師器蓋・坏・高台・甕、須恵器蓋・坏・高台付坏・甕・壷、鉄製刀子・釘が出土している。

ＳＤ36（第3・4図，図版2）

東区南東で検出した溝で、長軸方位はN‐34°‐Wである。南東端は調査区外に及び、南西端は削平の影響により途切れる。長さは13.7mで、幅は断面図に示した箇所で0.8～1.7mを測る。深さはD‐D´間で11cm、その他は30～34cmを計測し、北へ向かって緩傾斜を成す。断面形は凹レンズ状の底面から外傾しながら立ち上がる。埋土内からは土師器坏・甕、須恵器甕のほか、弥生土器・黒曜石剥片が出土した。

ＳＤ42（第3・4図，図版2）

西区東で検出した。遺構の北側が調査区外に及ぶが、長さ9.4m分を確認できた。長軸方位はN‐46°‐Wを示す。幅は断面図に示した部分で1.0～1.6mを測り、深さは23～26cmである。溝底はフラットであるが、南端の一部が土坑状に10㎝程度深くなっている。断面形は、概ね逆台形を成すが、南側は土坑状の窪みの影響で東西両側が一段高い。埋土内からは土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・甕・壷が出土した。

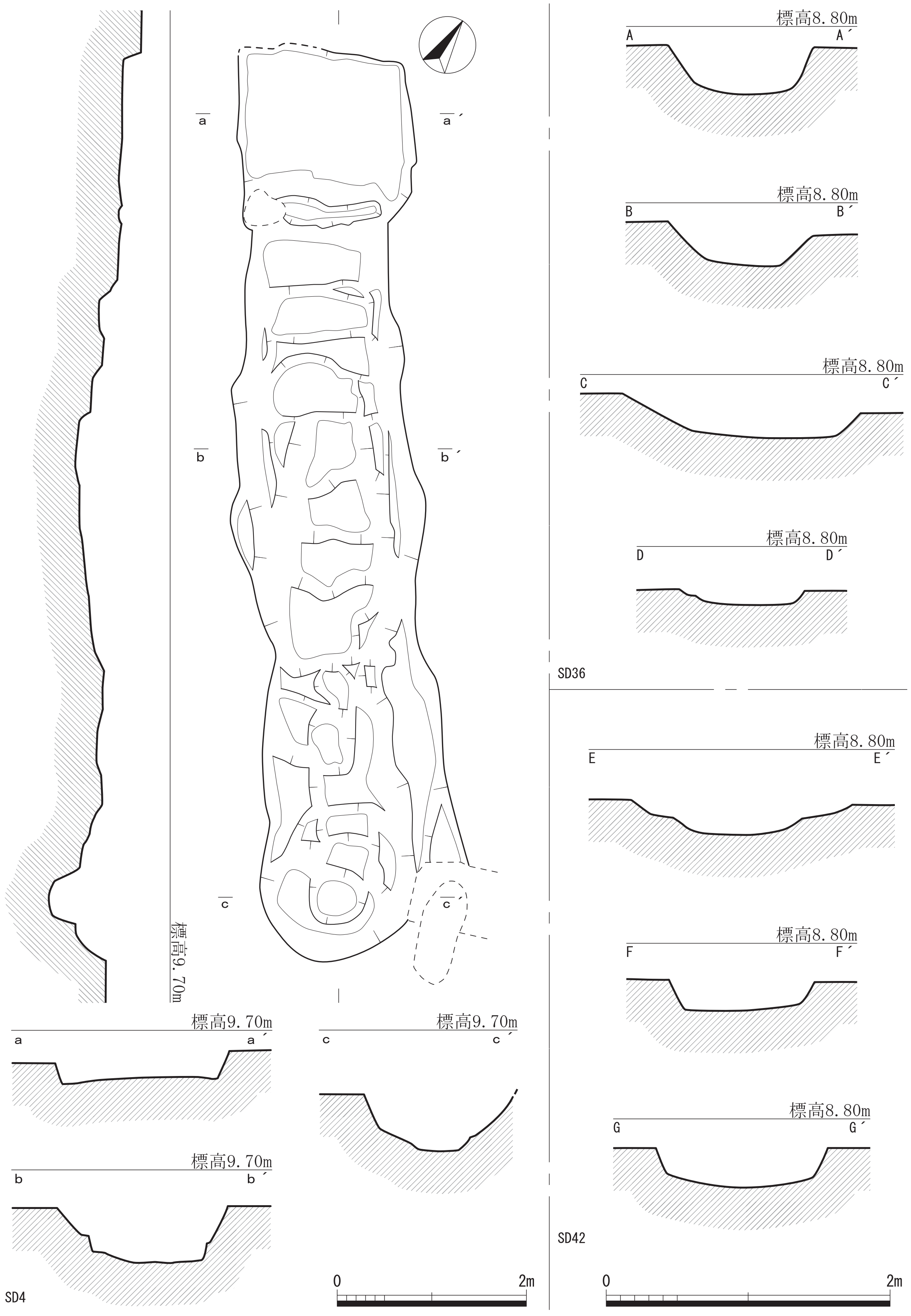
土坑

ＳＫ１（第5図，図版3）

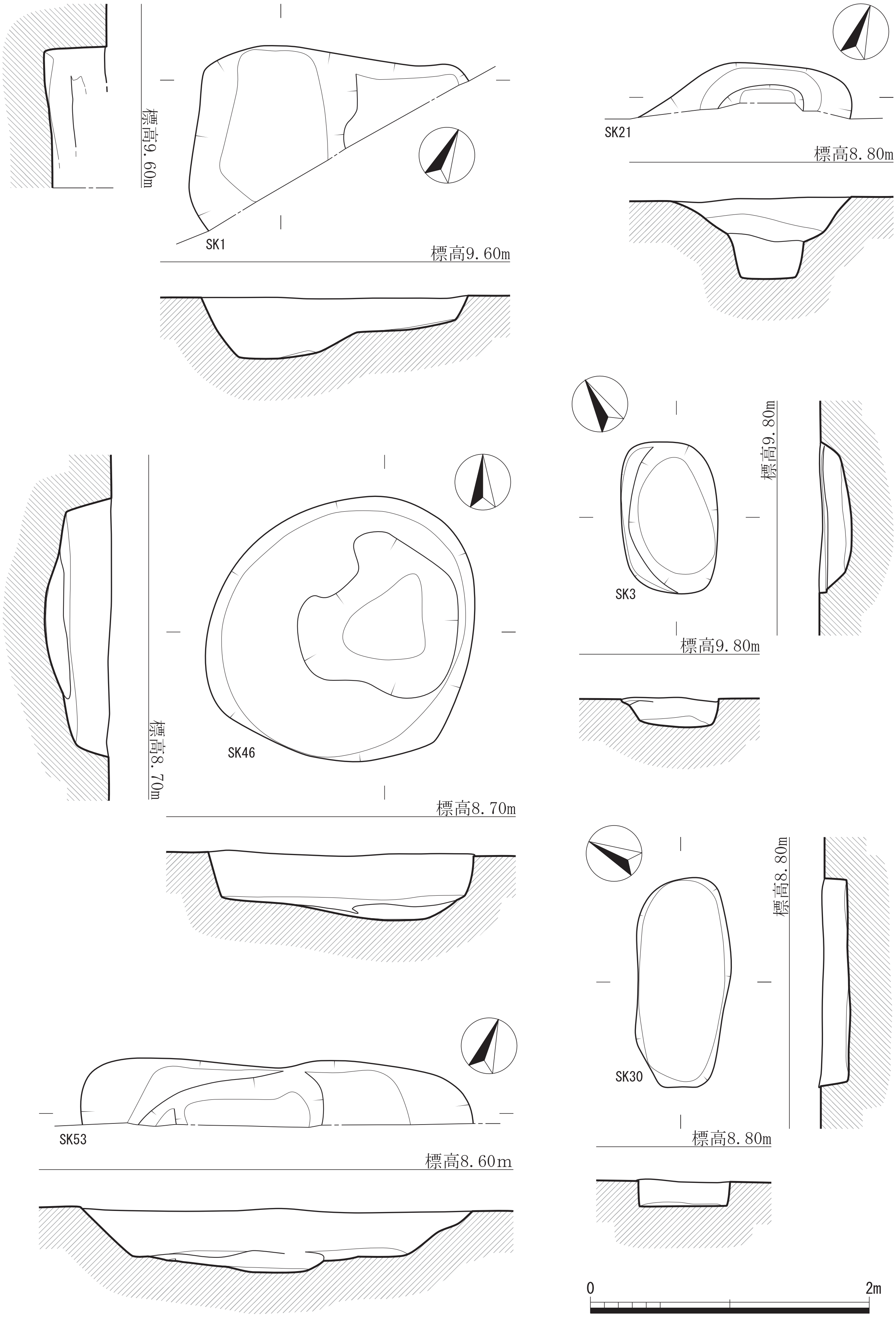
東区北東で検出した。一部調査区外に延びる。平面形は東西方向に長い隅丸長方形と考えられ、長軸長1.91m以上、短軸長1.20m以上を測る。一方、底面の平面形は南北に長く、長軸長1.09m以上、短軸長0.77mである。底面東側にはテラスを有す。深さは、底面まで44㎝、テラスまで23㎝である。埋土内からは弥生土器甕・壷・鉢・器台が出土した。

ＳＫ３（第5図）

SK1の10m北西で検出した。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸長1.08m、短軸長0.69mを測る。底面の平面形は倒卵形を呈し、長軸長0.84m、短軸長0.51mである。底面までの深さは20㎝で、底面中央が僅かに窪む。西壁沿いには幅5～10㎝の狭小なステップを有している。埋土内からは弥生土器の甕片2点および須恵器の高台付坏片1点が出土したのみである。



第４図　ＳＤ４・36・42 実測図（ＳＤ４：1/60、その他：1/40）



第５図　ＳＫ１・３・21・30・46・53 実測図（1/40）

ＳＫ21（第５図）

東区南端の中央付近で検出した。遺構の南側は調査区外に及ぶため、平面形は不明である。検出規模は東西長1.53m、南北長0.30mで、深さ58cmを測る。底面は水平で、壁面は約30㎝直に立ち上がったあと、大きく外傾して上端に至る。埋土内からは弥生土器甕・壷・器台が出土した。

ＳＫ30（第５図）

SK21の3m北東で検出した。平面形は小判形を呈する土坑で、規模は長軸長1.49m、短軸長0.65m、深さ20cmを測る。底面は長軸長1.45m、短軸長0.61mで、断面形は凹形である。埋土内からは弥生土器の甕片が7点出土した。

ＳＫ46（第５図，図版３）

西区北東で検出した。平面形は惰円形で、直径は1.84～2.02mを測る。坑内東側は一段低く、上段までの深さは30～35cm、下段最深部までは48㎝である。底面の断面形は凹レンズ状を成し、壁面は底面から上段を経て、やや外傾したのち上端に達する。埋土内からは弥生土器甕・壷・高坏・器台および黒曜石剥片が出土した。

ＳＫ53（第５図，図版３）

西区南西で検出した。SK54に先出する。南半は調査区外に及ぶが、平面形は東西に長い長円形と推定される。規模は、長軸長2.80m、短軸長0.42m、深さ46cmを測る。坑内中央に底面を有し、その西側に狭小なステップを2段、東側に広大なステップを1段設ける。断面形は略逆台形を呈する。埋土内からは弥生土器甕・高坏が出土した。

ＳＫ54（第６図，図版３）

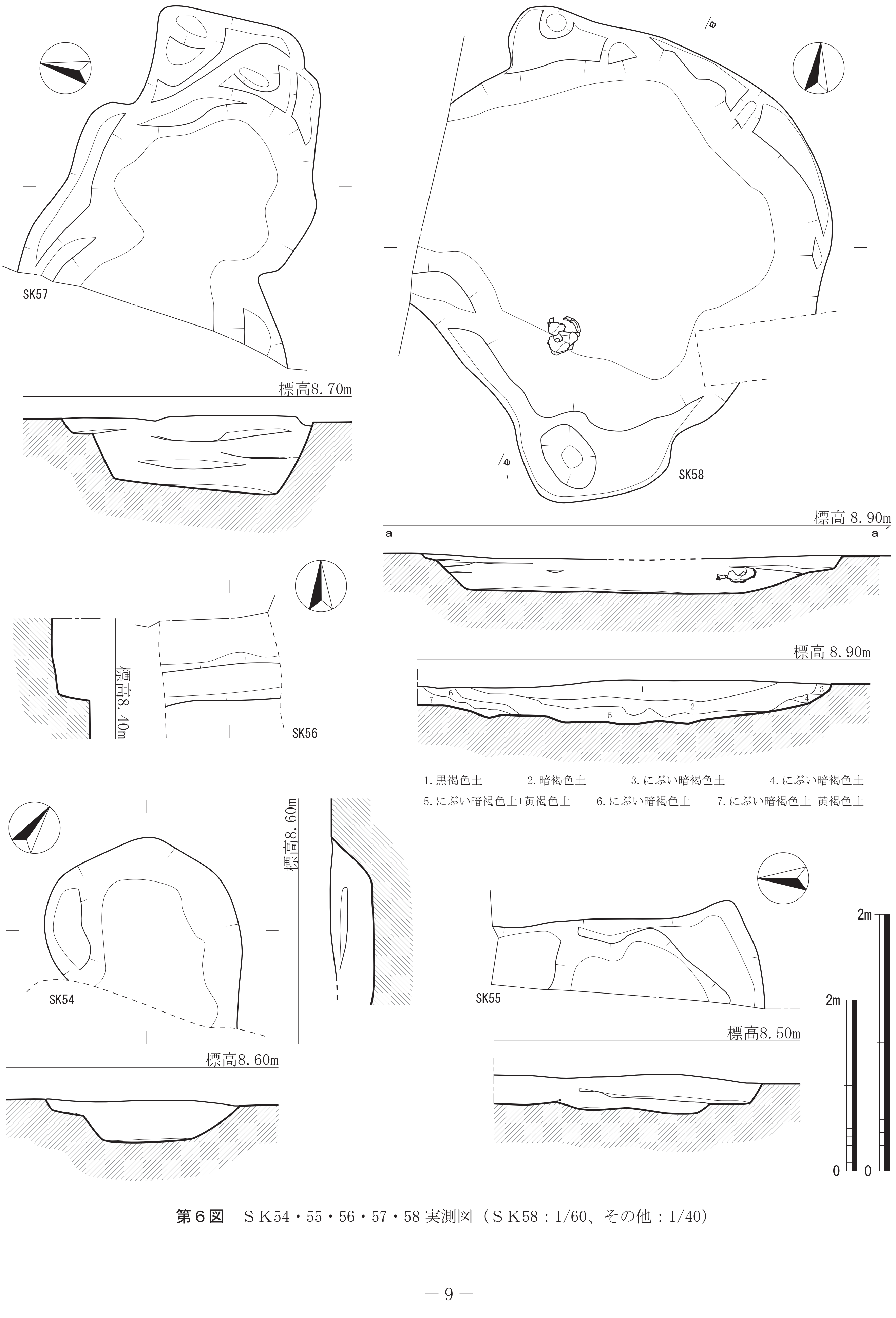
SK53の北側で検出し、これに後出する。平面形は倒卵形と推定され、規模は長軸長1.51m以上、短軸長1.52m、深さ34cmである。坑内南西側には底面より20㎝上位にステップを有す。底面の断面形はほぼ水平で、壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。埋土内からは弥生土器甕・高坏が出土した。

ＳＫ55（第６図）

西区南西で検出した。SK56に後出する。大部分が調査区外に及ぶため平面形は不明であるが、検出規模は、東西長0.81m以上、南北長2.11m以上を測り、深さは最深部で30cmである。底面の断面形は波板状で、北側の7cm上位と南側の7～17cm上位にステップが認められた。埋土内からは弥生土器の甕細片が6点出土したが、SK56との関係から判断して混入したものと考えられる。

ＳＫ56（第６図）

SK55の東側で検出し、これに先出する。他の遺構と重複することや、北側が調査区外に及ぶことから、全容は不明であるが、検出規模は東西長0.92m、南北長0.64mである。底面までの深さは30cmを測り、南側は僅かに高くなっている。壁面はほぼ直に立ち上がり、上端に至る。埋土内からは混入した弥生土器甕・高坏のほか、須恵器甕が出土した。いずれも細片であり、図示できなかった。



第６図　ＳＫ54・55・56・57・58 実測図（ＳＫ58：1/60、その他：1/40）

ＳＫ57（第6図，図版3）

SK55の北東8mで検出した。西側が調査区外に至る。平面形は不整形で、検出規模は東西長2.43m、南北長2.23mを測る。深さは北側が47cm、南側が61cmであり、床面は南へ傾斜する。断面形は逆台形を成し、北側に2段、南側に1段のステップが認められた。また、東側にピット状の掘り込みを2箇所確認した。埋土に差異は認められず同一遺構として掘削したが、ピットが重複している可能性もある。埋土内からは坑内中央付近、南北方向に集中して多量の弥生土器が出土した。殆どの遺物が床面から30～40㎝浮いた状態であり、祭祀行為に関わるものと推定される。

ＳＫ58（第6図，図版3）

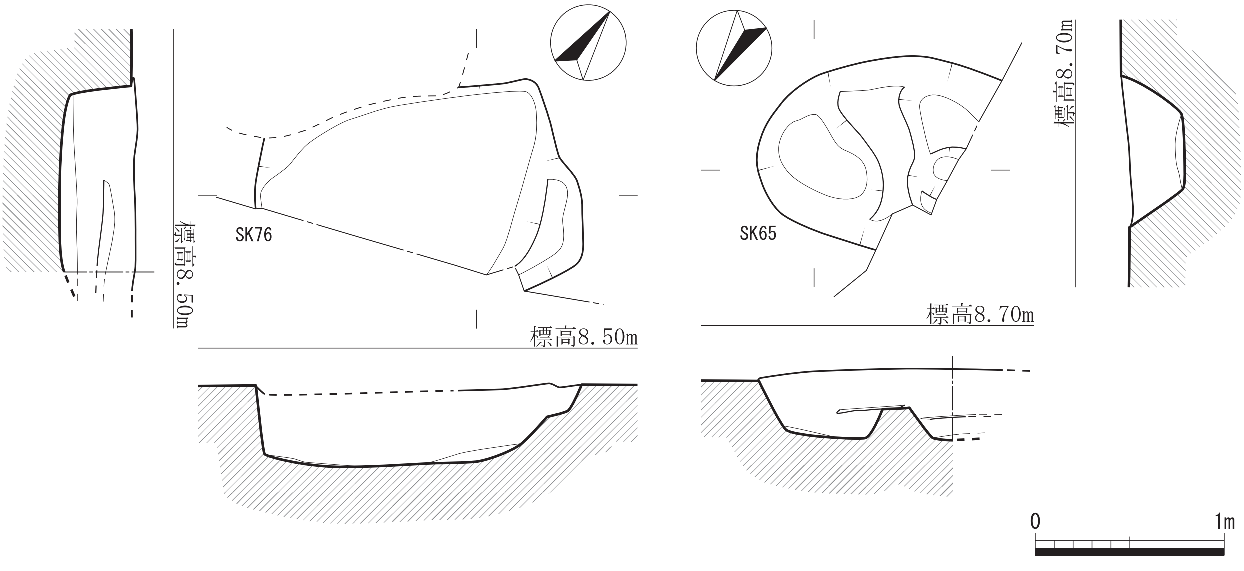
SK57の北東1mで検出した。西側が調査区外に及ぶ。平面形は南北に長い不整形で、検出規模は東西長4.70m、南北長5.58mを測る。一方、下端は東西に長く、東西長4.14m、南北長3.30mである。深さは最深部で50㎝を計測する。埋土は、最上位に黒褐色土が、その下位に暗褐色系の土壌が堆積し、一部にブロック土を含む。埋土内からは多量の弥生土器甕・壷・鉢・高坏・甕棺片、黒曜石製石鏃、刀子、板状鉄斧が出土した。

ＳＫ65（第7図）

SK57の南1mで検出した。西側が調査区外に至るが、平面形は長円形と推定され、検出規模は長軸長1.30m、短軸長1.03mである。坑内中央に設けられたステップの東西両側に下端が認められ、深さは35㎝程度である。埋土内からは弥生土器甕・壷・鉢が出土した。

ＳＫ76（第7図，図版4）

拡張区の東で検出した。ST52と重複し、これに先出する。また、南側が調査区外に及んでいる。平面形は長方形と推定され、長軸長1.63m、短軸長1.11m、深さ40㎝を測る。底面はほぼ水平であり、坑内東側には幅5～15㎝程度のステップを有す。壁面は、東側が緩やかに立ち上がるのに対して、その他はほぼ垂直に立ち上がる。埋土内からは弥生土器の甕片2点が出土したのみである。



第７図　ＳＫ65・76 実測図（1/40）

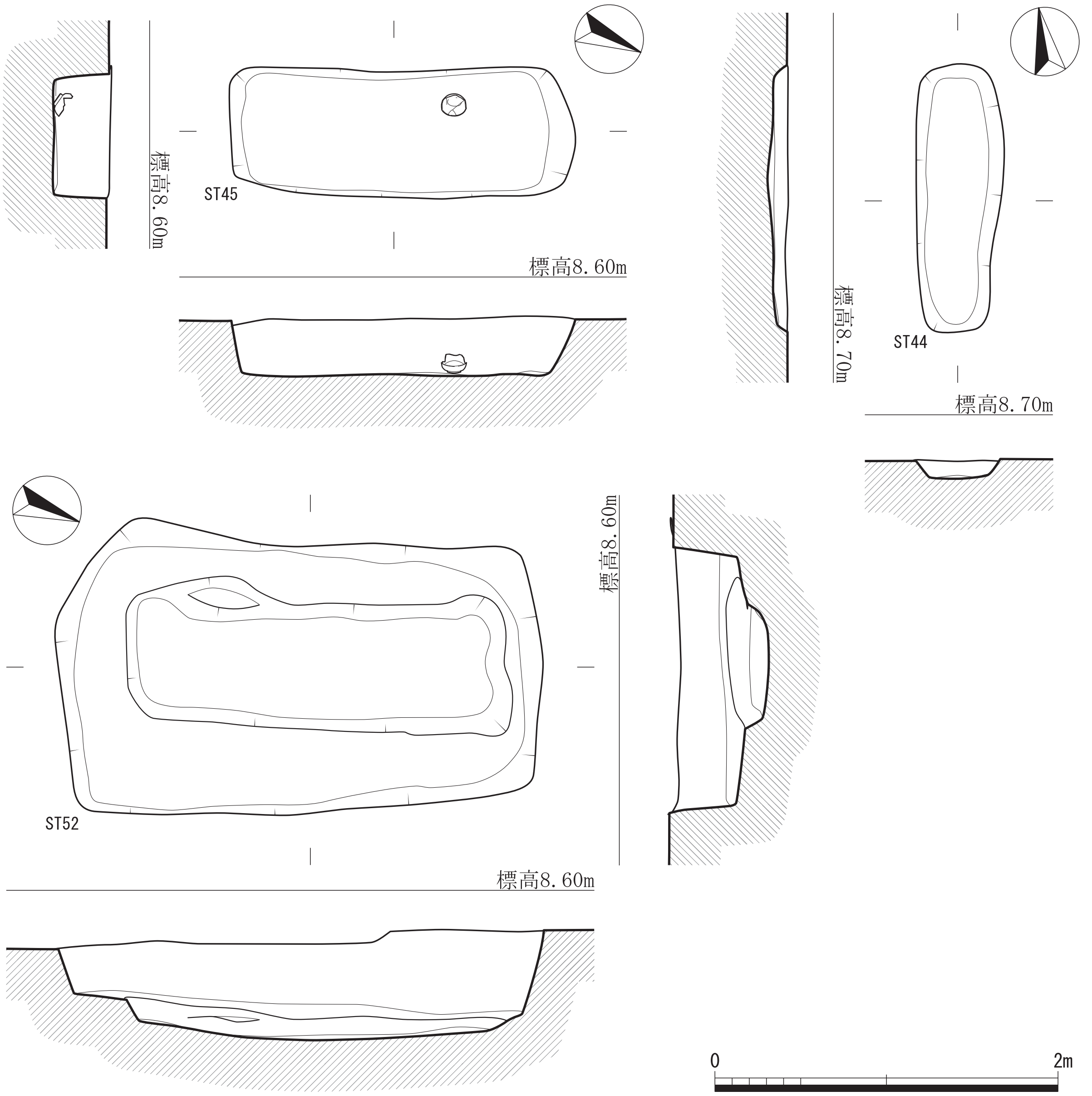
土壙墓

ＳＴ44（第8図，図版4）

西区中央付近で検出した土壙墓で、主軸方位はN‐9°‐Eである。平面形は隅丸長方形で、南側短軸が北側に対して狭くなっている。規模は長軸長1.57m、南側短軸長0.41m、北側短軸長0.51m、深さ約10㎝を測る。屍床はほぼフラットであるが、中央部が若干低くなっている。平面形状の特徴から頭位は北側と考えられる。なお、遺物は出土しなかった。

ＳＴ52（第8図，図版4）

ST44の南西10mで検出した。SK76に後出する。主軸方位はN‐19°‐Wである。二段掘りの土壙墓で、平面形は長方形を呈し、上段の南西部がやや張り出す。上段の規模は、長軸長2.81m、



第8図　ＳＴ44・45・52 実測図（1/40）

短軸長1.56mを測る。また、下段までの深さは30～50㎝程度で、南側が浅い。下段は、上段のやや北よりに掘削される。下段の規模は、長軸長2.21m、短軸長0.75～0.85m、深さ８～16㎝を測り、屍床の断面形状は凹レンズ状を呈する。遺物は出土していない。

木棺墓

ST45（第8図，図版4）

ST44の南東4mで検出した。主軸方位はN‐16°‐Wである。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長2.01m、短軸長0.73mで、底面までの深さは33㎝を測る。下端の規模は長軸長1.79m、短軸長0.65mである。底面はほぼ水平で、壁面は長軸部分が外傾し、短軸部分が垂直に立ち上がる。

棺痕跡は認められなかったが、埋土内から多数の鉄製釘が出土し、木棺墓と考えられる。また、底面中央の北側から黒色土器B類埦が出土した。埦は底面の直上で、東に傾いた状態であった。憶測の域を出ないが、棺材に立てかけるように供されたものと仮定すれば、棺材の厚さは10㎝程度、棺体の短軸内法は約50㎝と推定される。この他、弥生土器片と土師器片が出土した。

石蓋土壙墓

ST66（第9図，図版4）

西区南西で検出した石蓋土壙墓で、ST51・67に先出し、ST75に後出する。主軸方位はN‐83°‐Eである。墓壙は二段掘りで、上段の平面形は長方形を呈する。規模は長軸長1.96m、短軸長1.55mを測り、下段までの深さは41～58cmである。下段は上段の南よりに掘削され、平面形は長円形で、規模は長軸長1.41m、短軸長0.38mを測る。上段底面から屍床までの深さは西部が23cm、中央部が32cm、東部が47cmである。長軸断面は「足元掘込式」であり、短軸断面は袋状を呈する。

石蓋は、まず下段の上端東半に沿うように石材を配したのち、粘土で蓋の固定と高さの調整を行いながら、西から4石、東に1石を順次架構したものと推定される。最終的には計6石を用いて下段の墓壙を閉じている。石材は片岩製である。埋土内から遺物は出土しなかったが、屍床西側の床直上で赤色物を確認した。分析調査を行っていないため詳細は不明であるが、赤色顔料と推測され、断面形状とあわせて考慮すると頭位は西と考えられる。

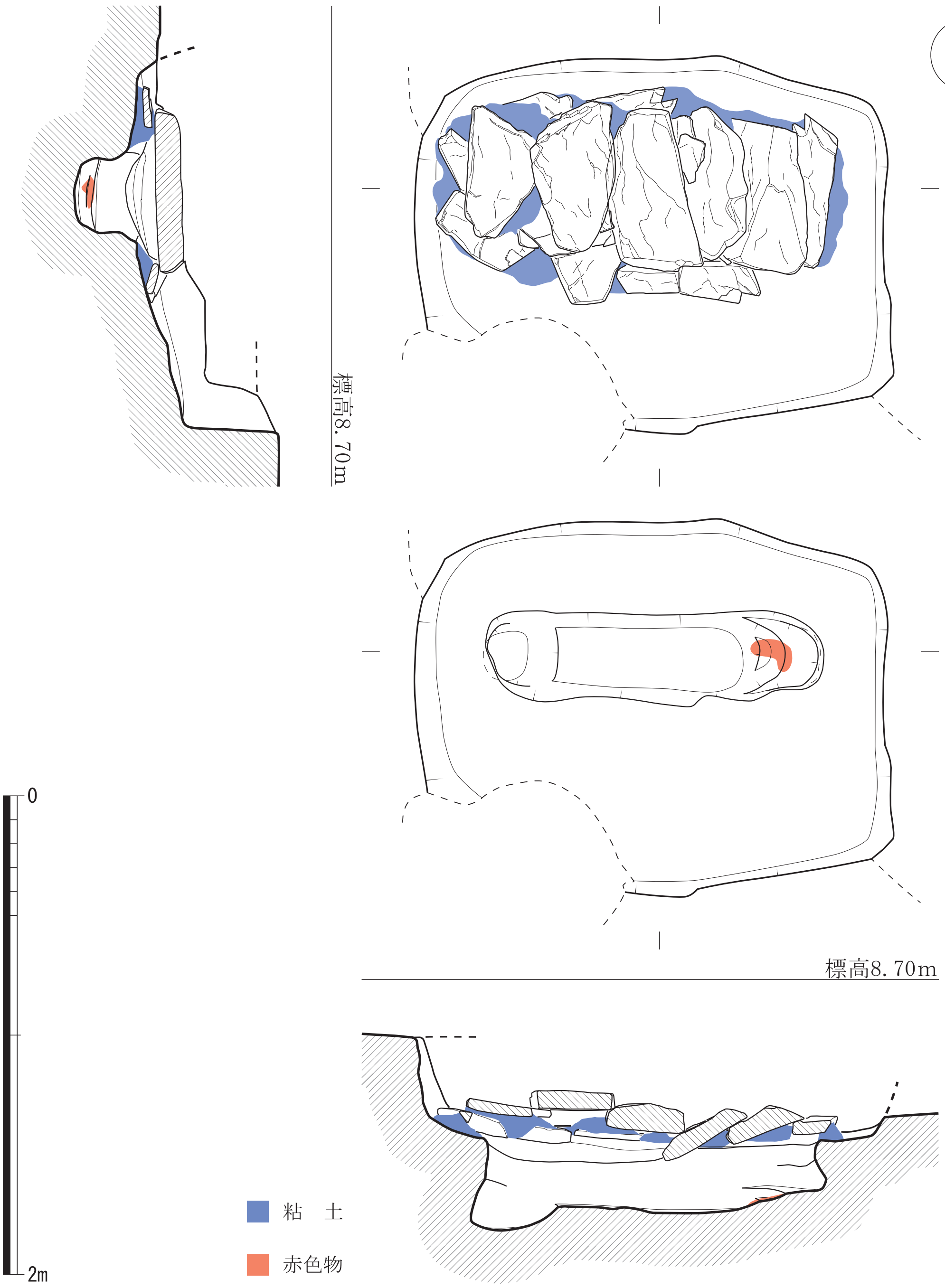
甕棺墓

ST47（第10図，図版5）

西区南西端で検出した大形棺で、上甕は遺存しない。墓壙の平面形は略方形で、一辺0.8～1.1m、深さ68㎝を測る。底面断面形は若干凹凸を成し、東壁は緩やかに立ち上がり、狭長なステップを経て上端に至る。西壁は袋状を呈する。傾斜角は45°を測り、主軸方位はN‐63°‐Eである。

ST48（第10図，図版5）

ST47の北東4mで検出した。ST49に先出する。削平の影響で遺存状態が悪い。墓壙の平面形は不明で、規模は東西長0.6m以上、南北長1.15m以上、深さは最大18㎝を測る。甕棺は小形棺で、上甕が元位置を留めていないため断定はできないが、合口形式は接口式と思われる。傾斜角は59°を測り、主軸方位はN‐67°‐Wである。

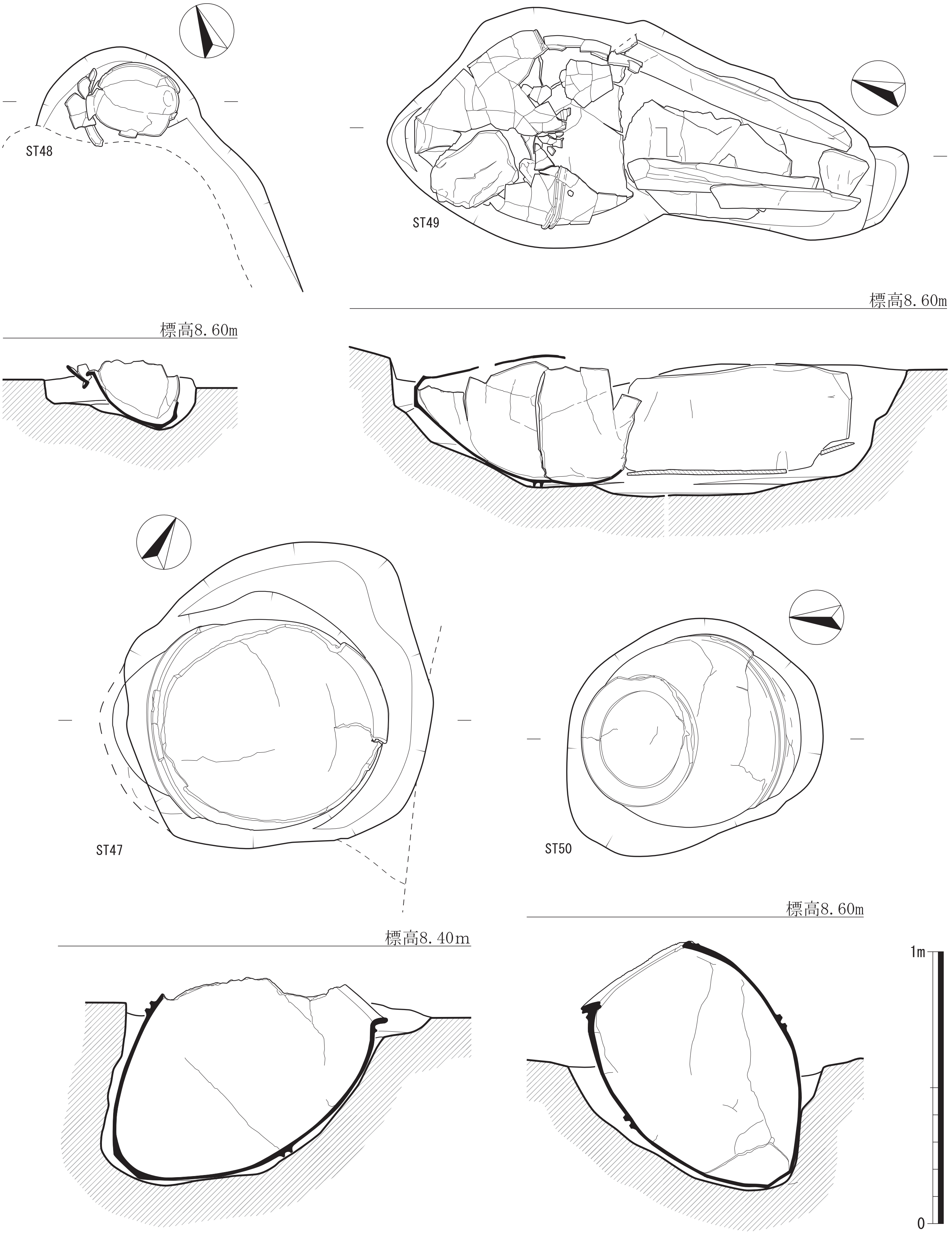


第９図　ＳＴ66 実測図（1/30）

ＳT49（第10 図，図版5）

ST48の西で検出した。ST48に後出する。検出当初は重複関係にあるものと考えていたが、埋土に明解な差異が認められなかったことと、後述する特徴から甕棺および石棺の折衷形態をとる墳墓と判断した。なお、調査中に甕棺の一部が崩落したため、立面図に一部反映できなかった。

主軸方位は甕棺を基準としてN－17°－Wを計測する。墓壙は不整形を呈し、長軸長1.92mを測る。甕棺側は最大で短軸0.86m、深さ46 cmを測り、断面形は甕棺の突帯付近から緩やかに立ち上



第 10 図　ＳＴ47・48・49・50 実測図（1/20）

がり、2段のステップを経て、垂直に立ち上がっている。石棺側は最大で短軸0.74m、深さ48㎝を測り、底面はほぼ水平であるが小口付近が底面から5㎝ほど高くなる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、中程から外傾したのち上端に至る。

甕棺は大形棺で、覆土の土圧の影響で上部より押しつぶされたような状態で出土した。甕棺の底部付近には片岩製の石材が据え置かれている。口縁部付近は打ち欠かれており、石棺と接することを意図したものと推定される。傾斜角は底部の位置から判断すると±0°で、墓壙に沿うように埋置され、甕棺の下位と敷石の高さがほぼ一致する。

石棺は扁平な石材1石を屍床とし、西側壁に2石、東側壁に1石を立てる。石材はすべて片岩製である。側壁は削平時の影響か東に若干傾いた状態であるが、ほぼ元位置を留めているものと思われる。南側で検出した小振りの1石は小口を閉じた石材の一部が落ち込んだものであろう。棺内内法は、現状で長軸が側壁端部間で0.88m、短軸が0.16～0.39mを測る。頭位は不明であるが、石棺南側が非常に狭小であることから、北と推定される。棺内から遺物は出土しなかった。

ST50（第10図，図版5）

ST49の東1mで検出した。上甕は削平の影響により遺存状態が悪く、図化できなかった。検出できた墓壙の平面形は不整形を呈し、規模は長軸長1.01m、短軸長0.77m、深さ47cmを測る。北壁は緩やかに傾斜を成し、南壁は垂直に立ち上がる。合口形式は接口式で、下甕は大形棺、上甕は胴部中位から上半を打ち欠く。傾斜角は56°を測り、主軸方位はN-±0°である。

ST51（第11図，図版5）

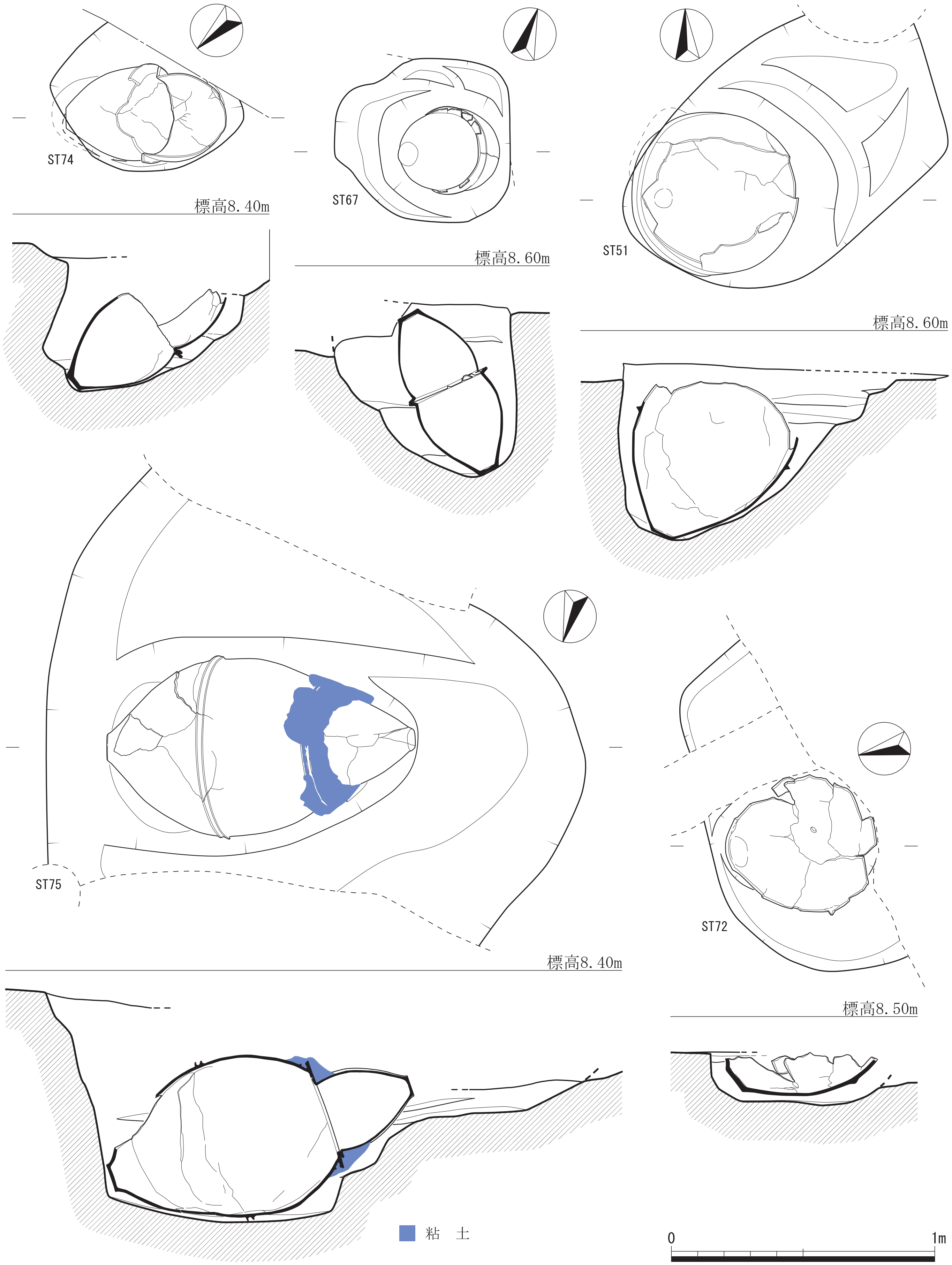
ST50の東2mで検出した。ST66に後出する。上甕は下甕の埋土内に落ち込んでおり、図化していない。墓壙の平面形は長円形で、規模は長軸長1.33m以上、短軸長0.82m、深さ67cmを測る。壙内東側にはステップを3段有し、底面は狭小である。壁面は東側が緩やかに、西壁が垂直に立ち上がっている。合口の形式は不明で、下甕は大形棺、上甕は胴部中位から上半を打ち欠く。傾斜角は64°を測り、主軸方位はN-87°-Wである。

ST67（第11図，図版5）

ST51の西2mで検出した。ST66に後出する。墓壙の平面形は略方形で、一辺0.62～0.67m、深さは66㎝である。底面は狭小で、西側から北側へステップが巡り、順次高くなっている。壁面は東壁が垂直に、西壁が階段状に立ち上がる。甕棺は接口式の小形棺で、傾斜角は63°を測り、主軸方位はN-73° -Eである。

ST72（第11図，図版5）

拡張区西で検出した。削平および攪乱が著しく上甕は遺存しない。墓壙の平面形は不明であるが、東西長1.36m、南北長0.65m以上、深さ20㎝を測る。壙内の東西両側に広大なステップを有しており、底面との比高は15㎝程度である。底面にはやや凹凸が確認できるが、ほぼ水平である。北壁は外傾したのち、中程で垂直に立ち上がる。甕棺は大形棺で、傾斜角は39°を測り、主軸方位はN-15° -Eである。



第 11 図　ＳＴ51・67・72・74・75 実測図（1/20）

ST74（第 11 図 , 図版5）

ST72の東4mで検出した。南側が調査区外に及ぶ。検出できた墓壙は、平面形が楕円形、直径が 0.6m程度と推定され、深さは56㎝である。底面断面形はスロープ状で、東へ比高を減じる。壁面は、東壁が奥行き最大20㎝掘り込まれ袋状であるのに対し、西壁は底面から引き続き緩傾斜を成し、2段のステップを経て垂直に立ち上がる。甕棺は接口式の小形棺で、傾斜角は 40°を測り、主軸方位はN - 43° -Eである。

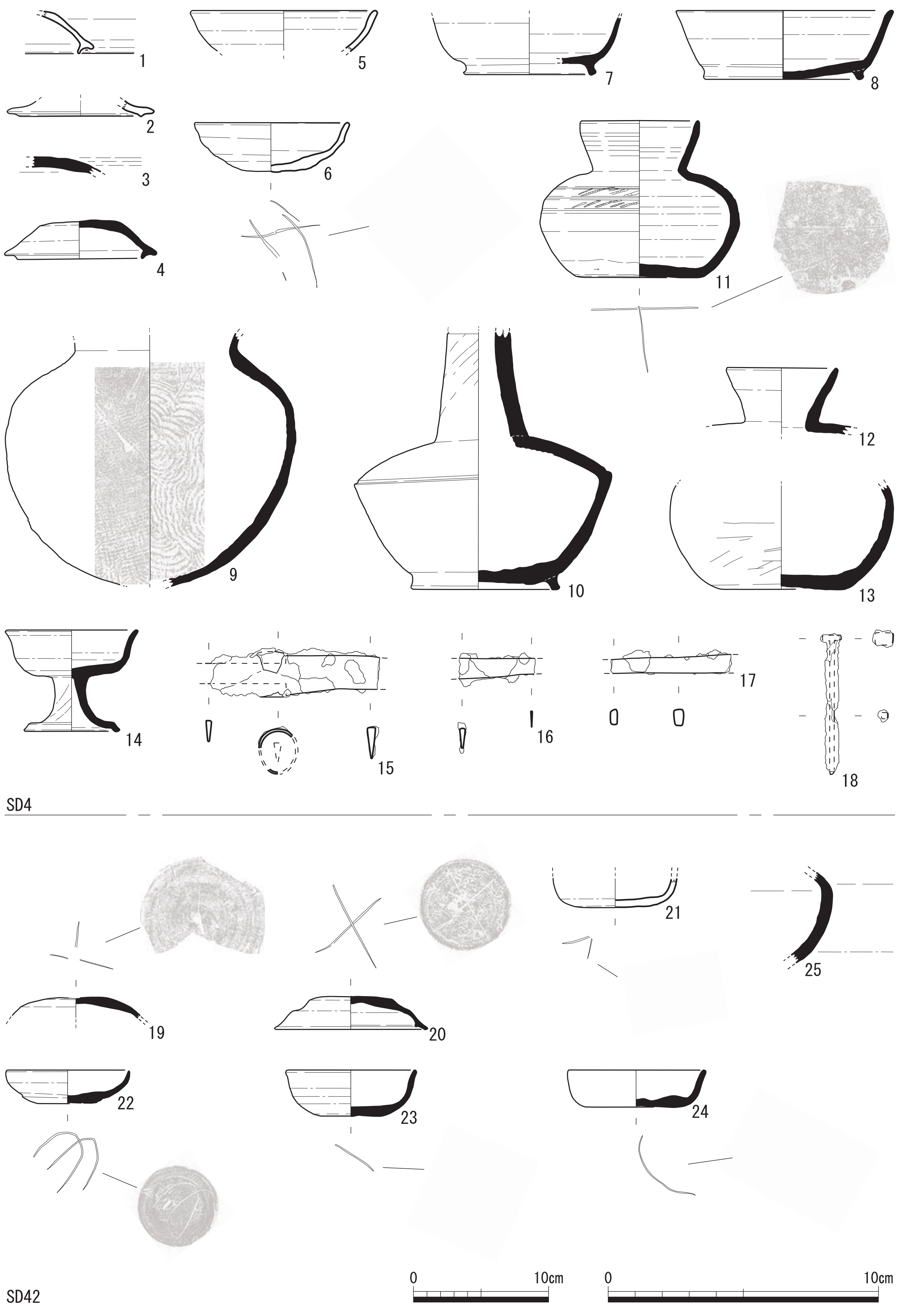
ST75（第 11 図 , 図版5）

ST74の北1mで検出した。ST66に先出する。墓壙の平面形は不明で、規模は東西長2.05m、南北長 1.53m以上、深さ 87 ㎝を測る。底面の断面形は凹レンズ状で、東壁は外傾し、西壁は階段状を成す。土圧の影響で上甕の合口付近が下甕内に押し込まれている。甕棺は小形棺と大形棺の接口式で、接合部に目貼り粘土を施す。傾斜角は 17°を測り、主軸方位はN - 73° -Eである。

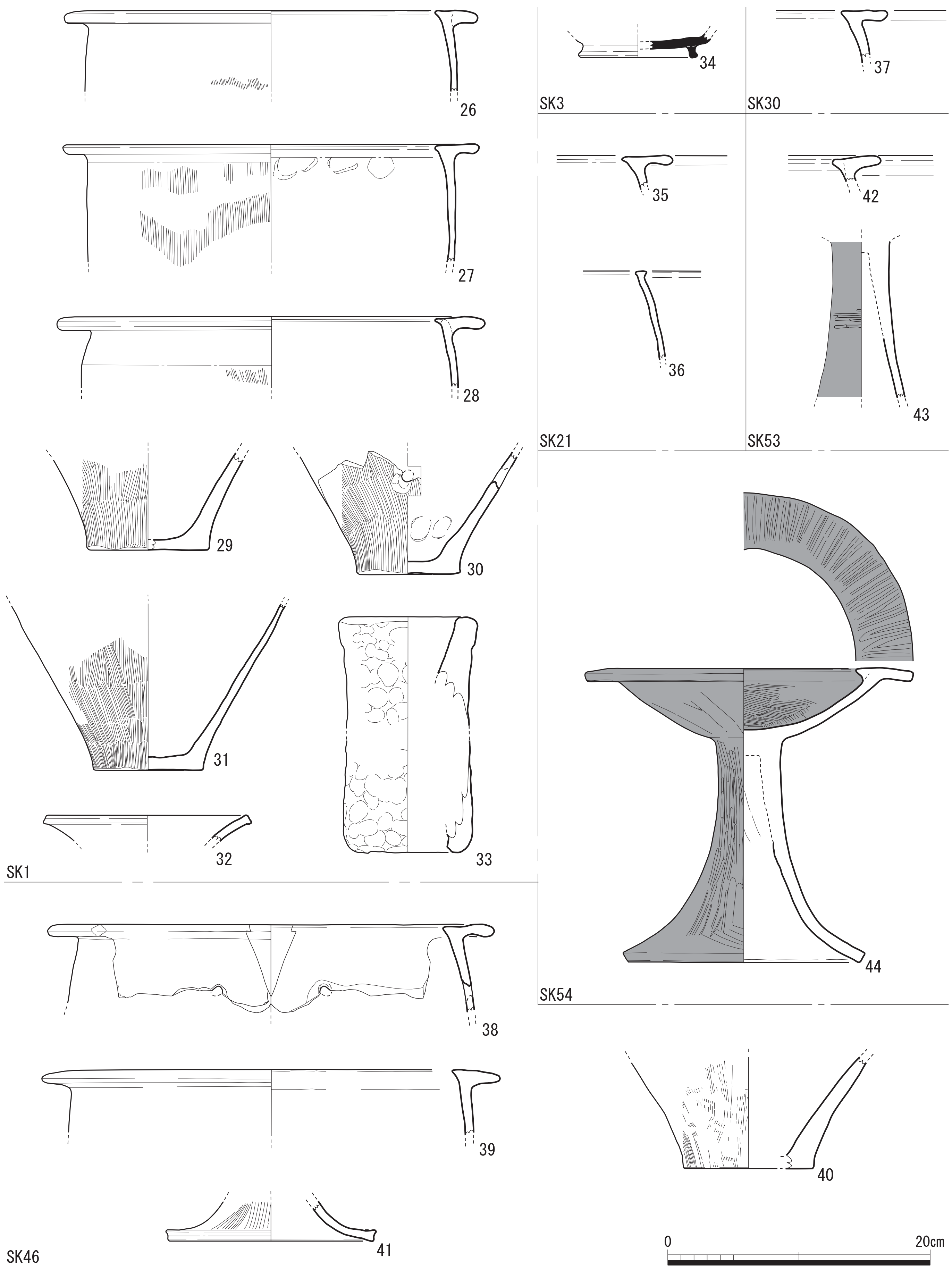
ⅲ. 出土遺物

本調査ではパンコンテナー 22 箱分の遺物が出土した。その大半は甕棺墓およびSK57・58 から出土した弥生土器である。須恵器・土師器がこれに次ぎ、黒色土器・石製品・金属製品はいずれも少量で、この他に縄文土器2点を採集している。紙幅の都合上、甕棺についてのみ概略を記す。

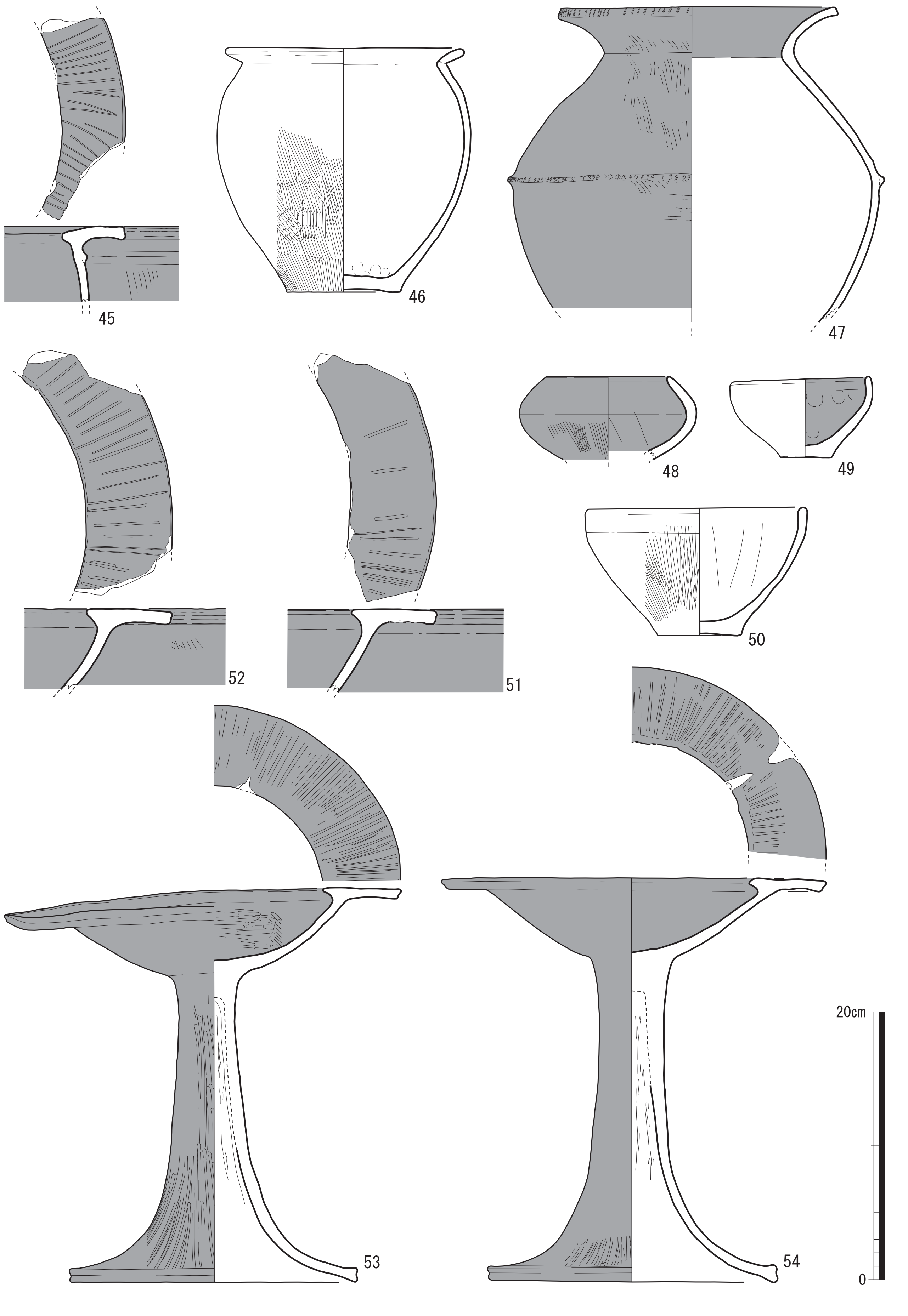
94 はST47下甕で、器形は倒卵形を呈し、頸部はややすぼまる。口縁はく字状を呈し、傾斜がきつい。口縁下に三角突帯を1条、胴部中位の下方にコ字状突帯を2条巡らす。外面および口縁内面に刷毛目調整が良く残る。**95・96** はST48 出土甕棺で、前者は底部を欠く。胴部は丸みを持ち、95 の張り出しが大きい。95の口唇は肥厚し、端部が垂下するのに対して、**96** の口縁は内傾し、内側に稜を有す。**97**はST49 下甕で、底部はやや上げ底で、胴部は全体的に丸みを持つ。器壁は薄く均一で、胴部中位にコ字状突帯が2条付される。外面全体に刷毛目を施し、胴部下位には径 1.2 ㎝程度の孔が内面より穿たれる。**98** はST50 上甕で、胴部中位で打ち欠く。底部は僅かに上げ底で、突帯はコ字状を呈する。**99** はST50 下甕で、器形は丸く、口縁下ですぼまる。口縁はT字状を呈し、上面は内傾する。口縁下に三角突帯を1条、胴部中位にコ字状突帯を2条巡らす。**100** はST51上甕で、底部を欠く。胴部中位で打ち欠かれ、その直下に三角突帯が1条認められる。**101** はST51下甕で、器形は全体的に丸く、肩が大きく張り、頸部はしまる。口縁は外反気味で、内側に稜を有す。胴部中位に付したコ字状突帯には刻み目が施される。**102・103** はST67 出土甕棺で、やや上げ底の底部を有し、胴部は張り、頸部はしまる。口縁は逆L字状で、内傾し、後者の方がその傾向が顕著である。**104** はST72下甕で、口縁～胴部上位を欠く。器形は丸味が強く胴部中位にだれたコ字状突帯を1条付す。胴部下位に 1.5 ～ 2.5 ㎝程度の孔を内面より穿つ。**105・106** はST74出土甕棺で、胴が張り、前者の口縁はく字状に近く、後者は逆L字状である。**107**はST75上甕で、平底の底部を持ち、胴下位は比較的シャープである。口縁下で僅かにしまり、口縁は逆L字状を呈する。**108** はST75下甕で、底部はスマートで、器形は丸味を持ち、頸部は強くしまる。口縁はT字状を呈し、口縁下に1条、胴部中位に2条の三角突帯を巡らす。



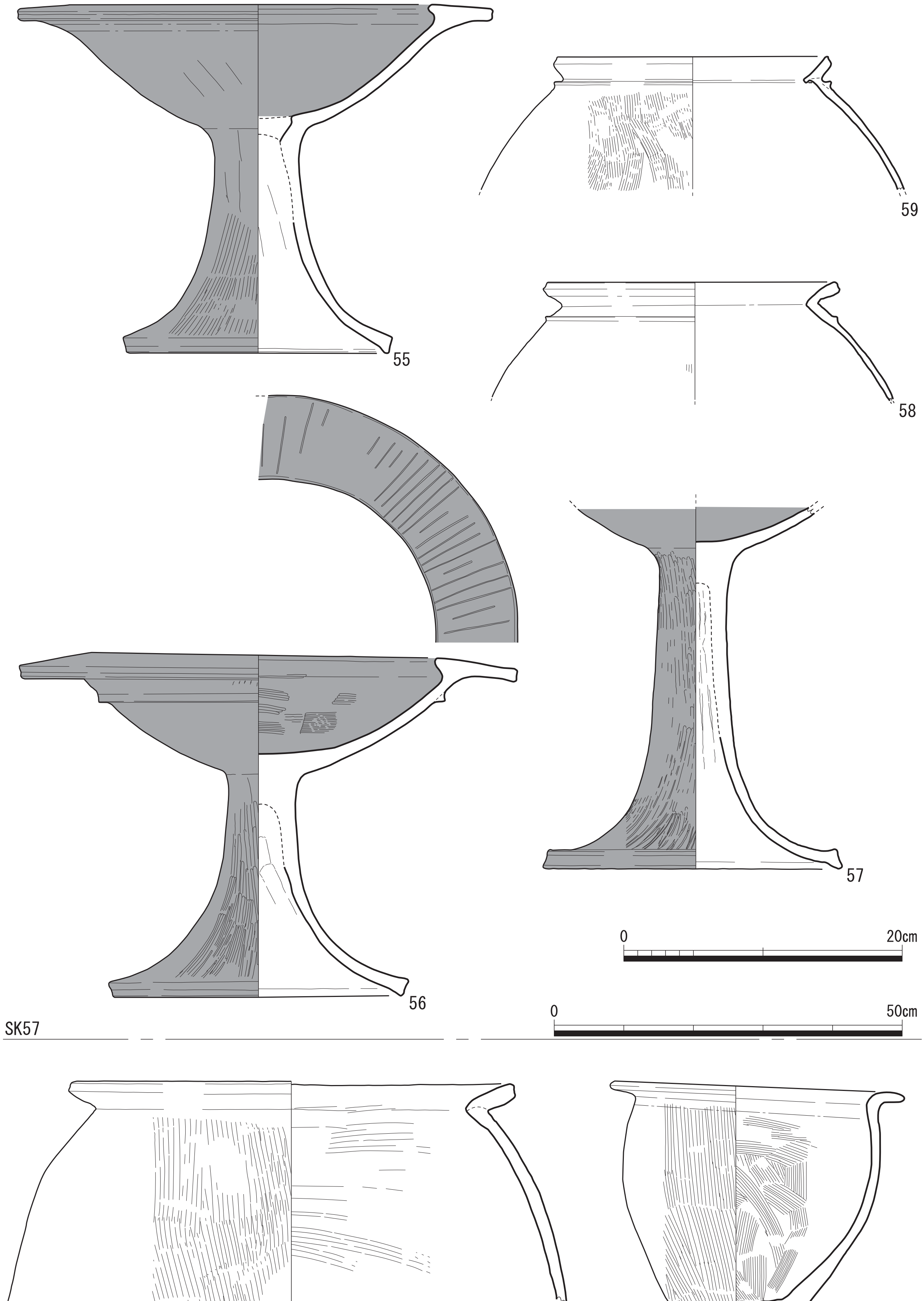
第12図　ＳＤ４・42出土遺物実測図（15・16・17：1/2、その他：1/4）



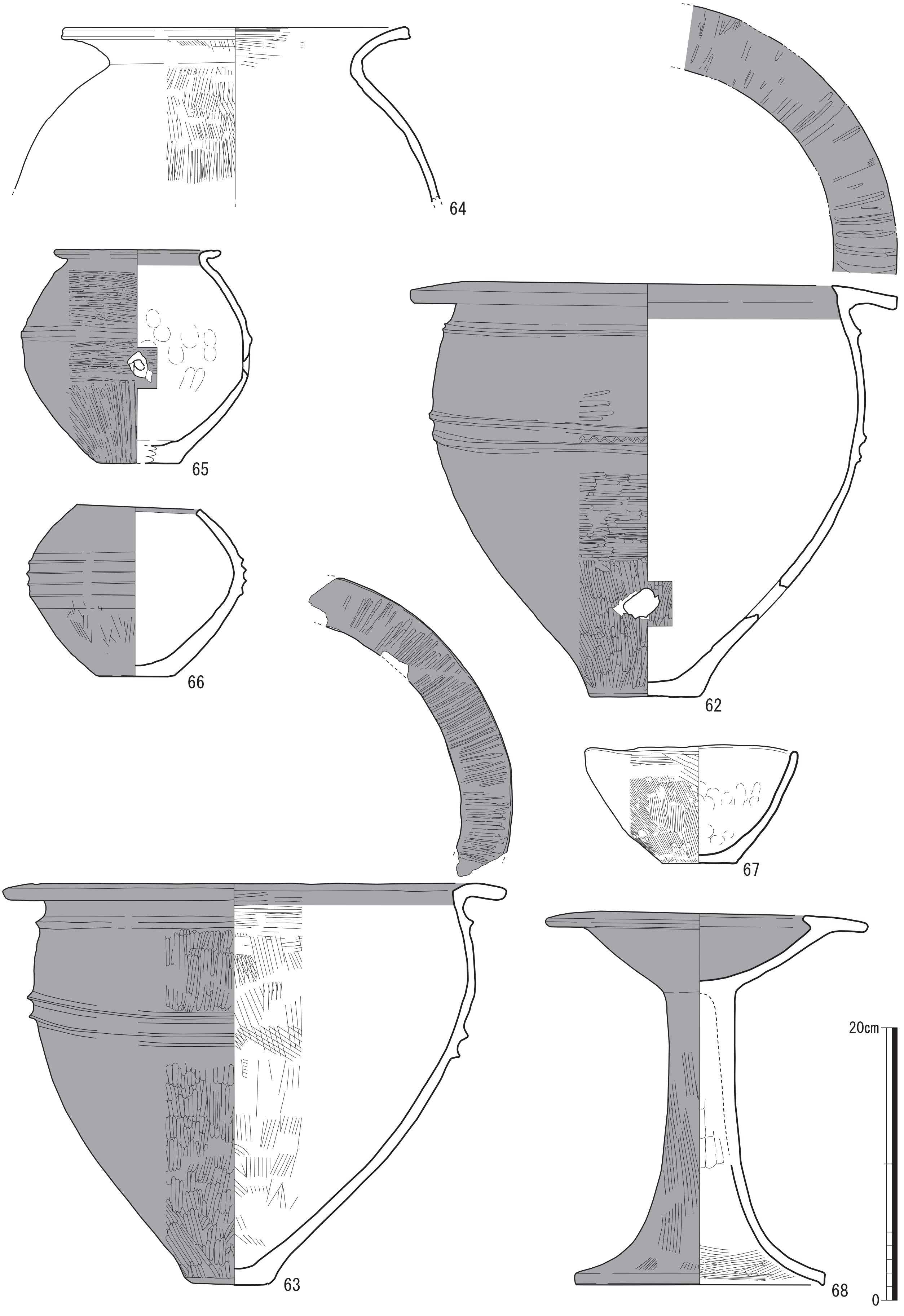
第 13 図　ＳＫ１・３・21・30・46・53・54 出土遺物実測図（1/4）



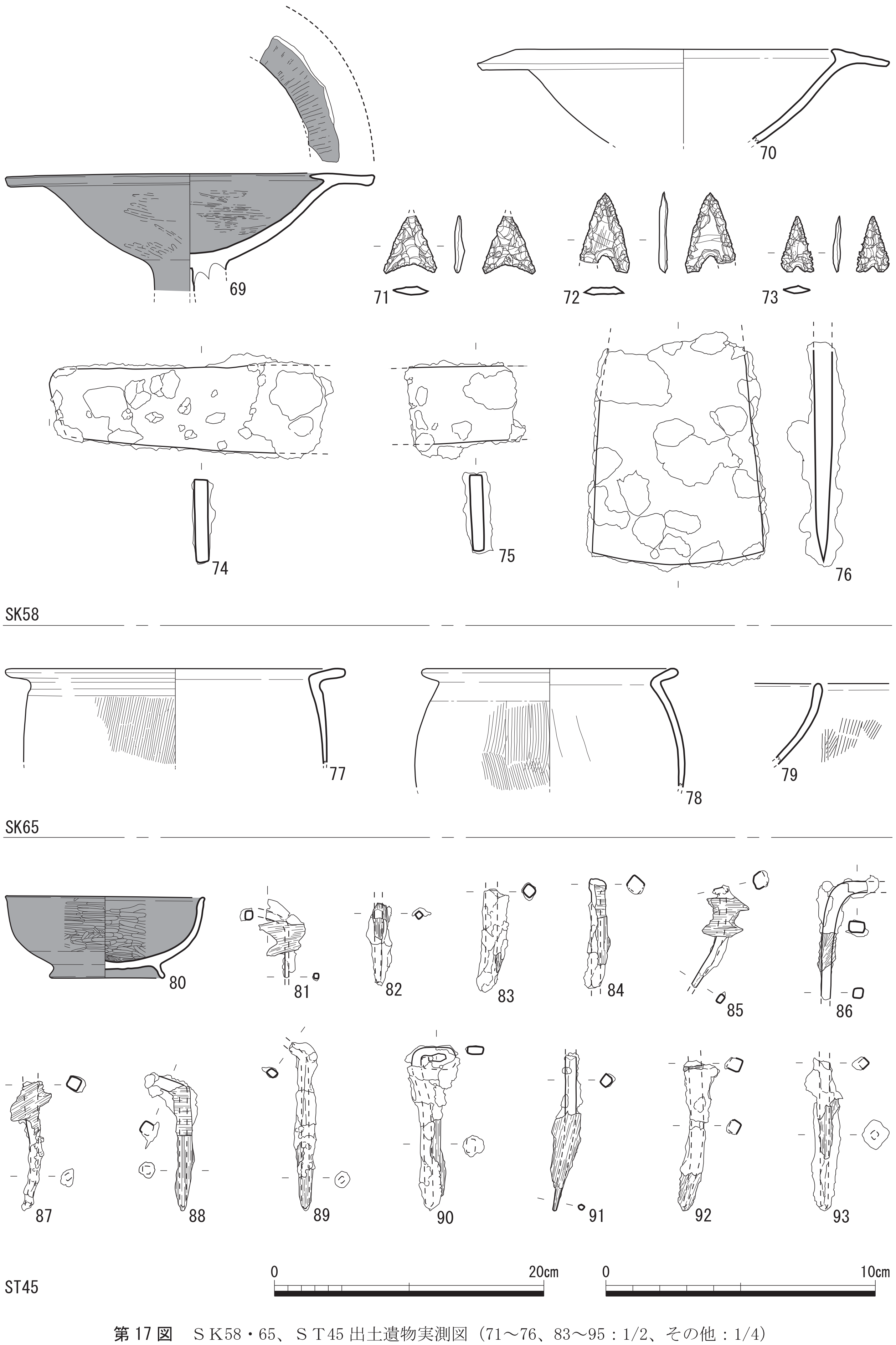
第 14 図　ＳＫ57 出土遺物実測図（1/4）



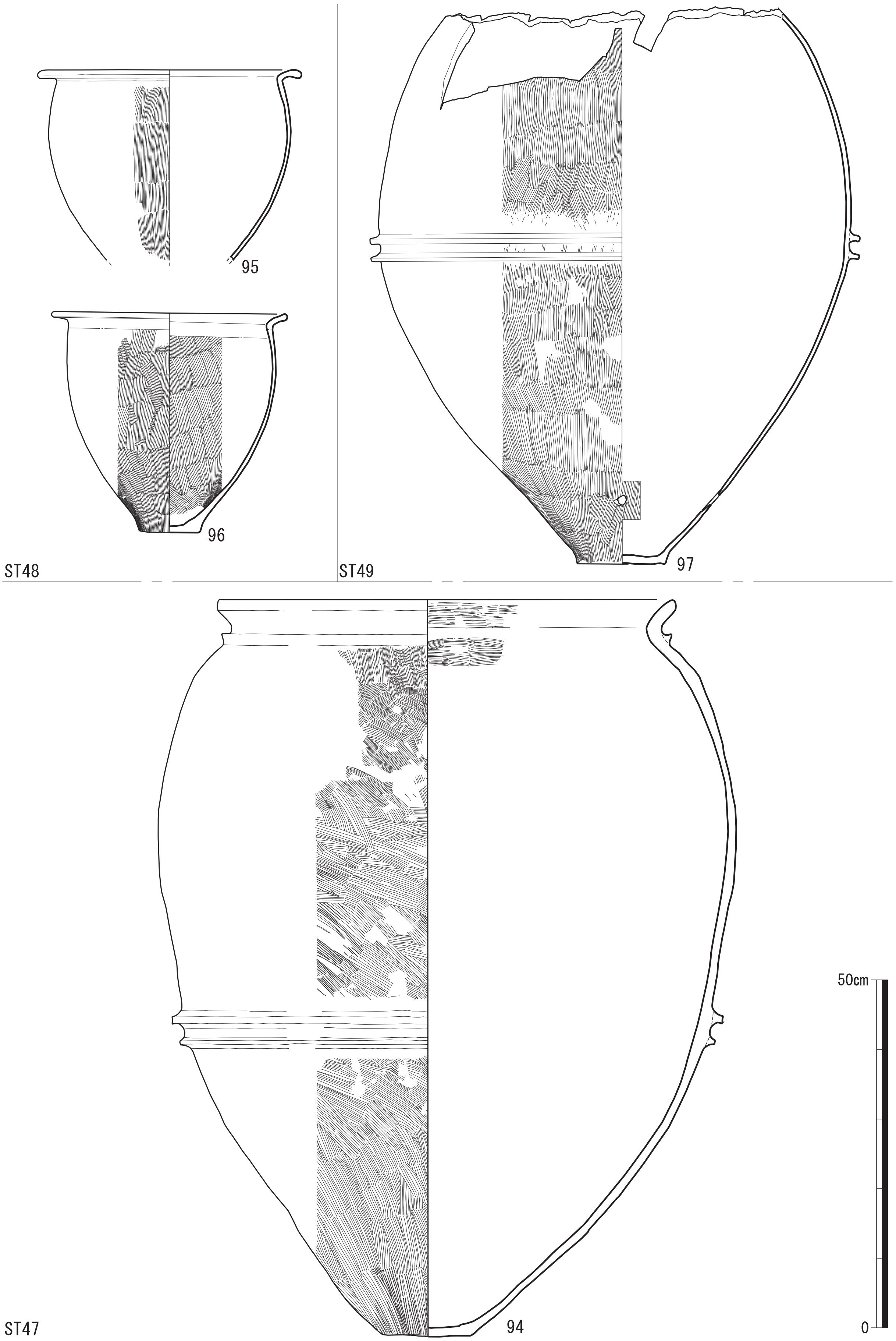
第 15 図　ＳＫ57・58 出土遺物実測図（58・59：1/8、その他：1/4）



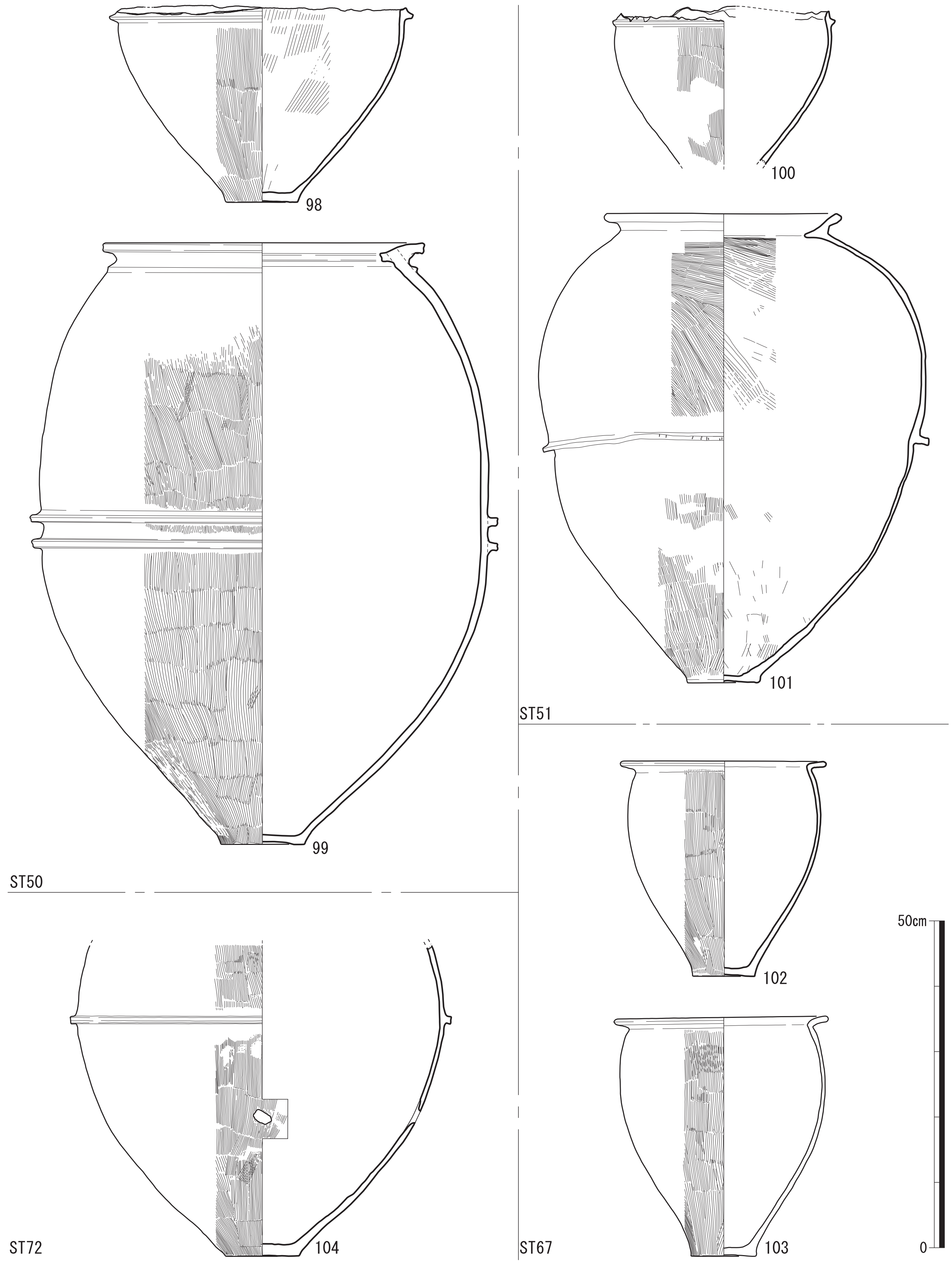
第 16 図　ＳＫ58 出土遺物実測図（1/4）



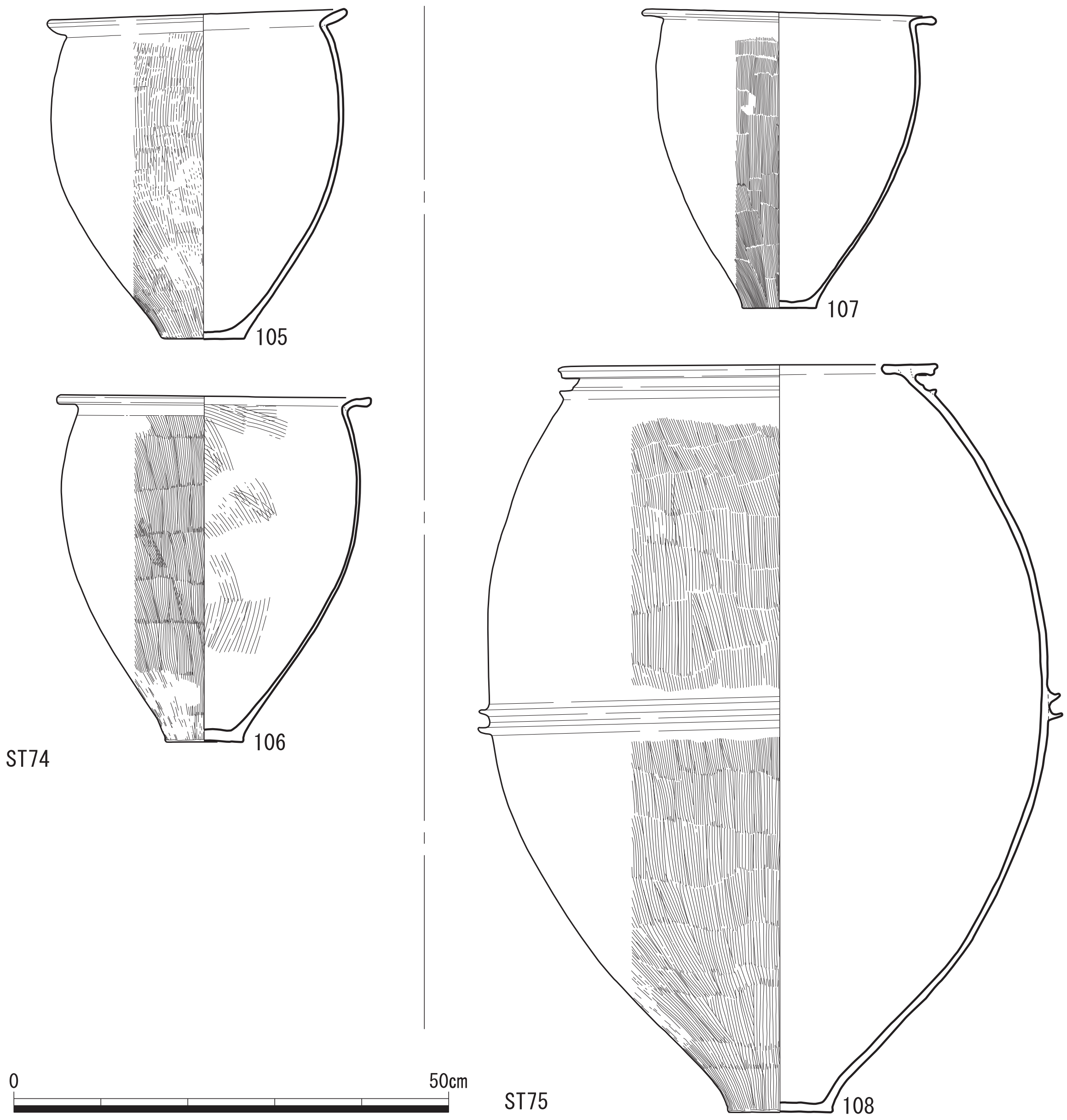
第 17 図　ＳＫ58・65、ＳＴ45 出土遺物実測図（71～76、83～95：1/2、その他：1/4）



第 18 図　ＳＴ47～49 出土遺物実測図（1/8）



第19図　ＳＴ50・51・67・72出土遺物実測図（1/8）



第 20 図　ＳＴ74・75 出土遺物実測図（1/8）

第 1 表　出土遺物観察表①

遺物 No.	出土遺構	種別	器種	法量(cm) 口径 長	法量(cm) 底径 幅	法量(cm) 器高 厚	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土	備考	登録番号
1 第12図	SD4	土師器	蓋	-	-	(3.1)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデか	ナデか 回転ナデ	精良		202113 000029
2 第12図	SD4	土師器	蓋	〔9.2〕	受部 〔11.2〕	(1.15)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	精良		202113 000030
3 第12図	SD4	須恵器	蓋	-	-	(1.2)	灰黄褐	灰黄	回転ヘラケズリ	ナデ	精良		202113 000028
4 第12図	SD4	須恵器	蓋	返し 9.2	天井部 6.1	2.9	灰白	灰白	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	細礫(長石)		202113 000024
5 第12図	SD4	土師器	坏	〔11.8〕	-	(3.0)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	精良		202113 000031
6 第12図	SD4	土師器	坏	11.4	5.0	3.7	明赤褐 橙	橙	回転ナデ ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	細砂粒(白色砂粒)、赤色粒子	ヘラ記号	202113 000037
7 第12図	SD4	須恵器	高台	-	9.75	(4.2)	灰	褐灰	回転ナデ ヘラ切り後ナデ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	精良		202113 000027
8 第32図	SD4	須恵器	高台付坏	〔16.0〕	11.8	5.1	灰褐 褐灰	灰黄褐 褐灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	細礫(白色砂粒)		202113 000032
9 第12図	SD4	須恵器	甕	-	-	(18.6)	暗赤灰	暗灰	回転ナデ 格子タタキ	回転ナデ 当具痕	粗砂粒(白色砂粒)		202113 000036
10 第12図	SD4	須恵器	高台付壺	-	高台10.9	(19.0)	黄灰 オリーブ黒	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	細礫(長石)	シボリ痕	202113 000025

第２表　出土遺物観察表②

遺物 No.	出土 遺構	種別	器種	法量(cm) 口径 長	 底径 幅	 器高 厚	色調 外面	 内面	調整 外面	 内面	胎土	備考	登録 番号
11 第12図	SD4	須恵器	壺	〔8.8〕	〔9.4〕	〔11.6〕	灰 オリーブ黒	褐灰	回転ナデ　ヘラケズリ ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	粗砂粒(白色砂粒)、赤色粒子	ヘラ記号 図上復元	202113 000026
12 第12図	SD4	須恵器	壺	〔8.2〕	-	(4.8)	にぶい黄橙 黒	灰黒 灰赤	回転ナデ	回転ナデ ナデ	粗砂粒(白色砂粒)		202113 000035
13 第12図	SD4	須恵器	壺	-	10.7	(7.7)	黒褐 赤褐	暗赤灰	ケズリ後ナデ	回転ナデ	細礫(白色砂粒)		202113 000034
14 第12図	SD4	須恵器	高坏	〔9.8〕	脚部 7.0	7.5	黄灰 灰	黄灰 灰	回転ナデ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	粗砂粒(白色砂粒)、黒色粒子	シボリ痕	202113 000033
15 第12図	SD4	鉄製品	刀子	(6.4)	0.7～ 1.2	0.1～0.3	-	-	-	-	-	11.42g	202113 000087
16 第12図	SD4	鉄製品	刀子	(2.75)	0.6～ 0.75	0.05～ 0.2	-	-	-	-	-	1.53g	202113 000088
17 第12図	SD4	鉄製品	刀子	(4.45)	0.5～ 0.7	0.25～ 0.35	-	-	-	-	-	2.56g	202113 000085
18 第12図	SD4	鉄製品	釘	5.15	0.35～ 0.75	0.45～ 0.7	-	-	-	-	-	2.91g	202113 000086
19 第12図	SD42	須恵器	蓋	—	—	(1.5)	灰　浅黄 オリーブ黒	灰	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	粗砂粒(長石、石英)	ヘラ記号	202113 000001
20 第12図	SD42	須恵器	蓋	〔9.5〕	6.3	2.4	灰 灰黄	灰 灰黄	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ後ナデ	細礫(長石)	ヘラ記号	202113 000004
21 第12図	SD42	土師器	坏	—	6.0	〔2.15〕	にぶい黄橙 一部黒褐	橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ ナデ	細砂粒(雲母)	ヘラ記号	202113 000003
22 第12図	SD42	須恵器	坏	〔9.15〕	4.45	2.5	灰 灰黄	灰白 灰黄	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ	細砂粒(長石)	ヘラ記号	202113 000005
23 第12図	SD42	須恵器	坏	〔9.6〕	〔4.4〕	3.4	灰 黒	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ後ナデ	細礫(長石)	ヘラ記号	202113 000006
24 第12図	SD42	須恵器	坏	10.0	7.15	2.75	灰 黒	灰 灰黄	回転ナデ ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	細砂粒(長石)	ヘラ記号	202113 000007
25 第12図	SD42	須恵器	壺	—	—	(6.7)	灰	灰 にぶい赤褐	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	精良		202113 000002
26 第13図	SK1	弥生 土器	甕	〔31.5〕	-	(6.2)	浅黄 黄褐	浅黄	ヨコナデ 刷毛目後ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒(長石、雲母)		202113 000010
27 第13図	SK1	弥生 土器	甕	〔31.8〕	-	(8.95)	淡黄 にぶい橙	橙 にぶい黄橙	ヨコナデ 刷毛目後ヨコナデ	ヨコナデ　指オサエ 刷毛目か	細砂粒(石英、角閃石)		202113 000016
28 第13図	SK1	弥生 土器	甕	32.6	-	(5.4)	浅黄橙　黒 にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 刷毛目後ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒(雲母、角閃石)	スス付着	202113 000011
29 第13図	SK1	弥生 土器	甕	-	〔9.4〕	〔7.4〕	黄灰　橙 にぶい黄	にぶい黄橙 黒	刷毛目 ナデ	ナデか 指オサエ	細砂粒(石英、雲母) 粗砂粒(角閃石)		202113 000014
30 第13図	SK1	弥生 土器	甕	-	7.9	(9.35)	にぶい黄橙 にぶい黄褐	浅黄橙 灰黄褐	刷毛目	ナデ 指オサエ	細砂粒(角閃石) 細礫(石英)	穿孔	202113 000013
31 第13図	SK1	弥生 土器	甕	-	(8.4)	(12.7)	橙 黒	明黄褐	刷毛目　指オサエ ナデ	ナデか	細砂粒(雲母) 細礫(石英、長石)	スス付着	202113 000015
32 第13図	SK1	弥生 土器	壺	〔15.8〕	-	(1.95)	橙	橙	ヨコナデか	ヨコナデ	微砂粒(雲母)、赤色粒子		202113 000017
33 第13図	SK1	弥生 土器	器台	(9.0)	(7.9)	〔18.0〕	橙 にぶい黄橙	橙 にぶい黄褐	ナデ 指オサエ	ナデ	細砂粒(長石、雲母)	図上復元	202113 000018
34 第13図	SK3	須恵器	埦	-	高台9.05	(1.8)	灰 暗黄灰	黄灰	回転ヘラケズリ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	粗砂粒(長石)		202113 000023
35 第13図	SK21	弥生 土器	甕	-	-	(2.6)	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒(雲母、角閃石)、黒色粒子		202113 000039
36 第13図	SK21	弥生 土器	壺	-	-	(6.8)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒(雲母)、赤色粒子		202113 000038
37 第13図	SK30	弥生 土器	甕	-	-	(4.0)	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒(雲母、角閃石)		202113 000040
38 第13図	SK46	弥生 土器	甕	(34.0)	-	(6.7)	橙	橙	ナデ ヨコナデ	ナデ	微砂粒(雲母)	穿孔	202113 000044
39 第13図	SK46	弥生 土器	甕	〔34.8〕	-	(5.0)	灰白 にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ ヨコナデ	微砂粒(雲母)		202113 000045
40 第13図	SK46	弥生 土器	甕	-	(9.8)	(8.5)	にぶい褐	灰黄褐	刷毛目	ナデか	細砂粒(雲母)、赤色粒子		202113 000046
41 第13図	SK46	弥生 土器	高坏	-	脚部 (16.0)	(3.0)	橙	橙	刷毛目 ヨコナデか	ナデか ヨコナデか	粗砂粒(雲母)		202113 000047
42 第13図	SK53	弥生 土器	甕	-	-	(2.0)	にぶい黄橙	にぶい橙	ヨコナデ	ヨコナデ	精良		202113 000051
43 第13図	SK53	弥生 土器	高坏	-	-	(11.9)	橙 明赤褐	にぶい黄橙	ミガキ	工具ナデ ナデ	細礫(長石、雲母、角閃石)	丹塗り	202113 000052
44 第13図	SK54	弥生 土器	高坏	〔25.0〕	〔18.4〕	22.4	橙	にぶい黄橙	ヨコナデ　工具ナデ ミガキ	ヨコナデ	細礫(長石、石英、雲母)	暗文　丹塗り シボリ痕	202113 000053
45 第14図	SK57	弥生 土器	甕	-	-	(5.65)	赤褐 浅黄橙	明赤褐 にぶい橙	刷毛目	ヨコナデ	微砂粒(雲母)	暗文 丹塗り	202113 000057
46 第14図	SK57	弥生 土器	甕	〔17.9〕	8.5	18.2	灰白	浅黄橙	ナデ ヨコナデ 刷毛目	ナデ 指オサエ	細砂粒(雲母)、赤色粒子		202113 000059
47 第14図	SK57	弥生 土器	壺	20.7	-	(23.5)	赤褐 にぶい橙	灰黄褐 赤褐	ミガキ ナデ	ナデ	細砂粒(長石、石英、角閃石、雲母)	丹塗り	202113 000063
48 第14図	SK57	弥生 土器	壺	〔9.4〕	-	(6.2)	にぶい赤褐 にぶい黄橙	橙	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ 工具痕	細砂粒(雲母)	丹塗り 黒斑	202113 000055
49 第14図	SK57	弥生 土器	鉢	〔10.5〕	3.7	6.1	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ ヨコナデ 指オサエ	粗砂粒(角閃石)	丹塗り 黒斑	202113 000067
50 第14図	SK57	弥生 土器	鉢	16.6	6.3	9.4～9.6	にぶい黄橙 黄灰	にぶい黄橙	ヨコナデ　刷毛目 ナデ	ヨコナデ　ナデ 工具痕ナデか	細砂粒(雲母)	黒斑	202113 000058

第３表　出土遺物観察表③

遺物 No.	出土 遺構	種別	器種	法量(cm) 口径 長	法量(cm) 底径 幅	法量(cm) 器高 厚	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土	備考	登録 番号
51 第14図	SK57	弥生 土器	高坏	-	-	(6.2)	明赤褐 橙	にぶい赤褐 にぶい橙	ヨコナデ ナデか	ヨコナデ	細砂粒(雲母)	暗文 丹塗り	202113 000056
52 第14図	SK57	弥生 土器	高坏	-	-	(6.0)	にぶい橙	にぶい橙 灰褐	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ	微砂粒(雲母)	暗文 丹塗り	202113 000060
53 第14図	SK57	弥生 土器	高坏	29.2	21.1	29.5	赤褐 にぶい黄橙	明褐 明黄褐	ナデ ミガキ	ミガキ ヨコナデ	細礫(雲母、角閃石)	暗文 丹塗り シボリ痕	202113 000064
54 第14図	SK57	弥生 土器	高坏	28.7	21.0	30.3	赤褐 にぶい黄橙	赤褐 にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ ヨコナデ ナデ	粗砂粒(石英、雲母、角閃石、白色砂粒)	暗文 丹塗り シボリ痕	202113 000065
55 第15図	SK57	弥生 土器	高坏	(34.1)	(19.3)	25.0	にぶい橙 にぶい赤褐	にぶい黄橙 にぶい橙	ヨコナデ 刷毛目 ナデか	ナデか	砂粒(雲母)	丹塗り シボリ痕	202113 000068
56 第15図	SK57	弥生 土器	高坏	35.8	脚部21.5	24.8～ 24.35	明赤褐 にぶい黄橙	明赤褐 にぶい黄橙	ヨコナデ ミガキ 刷毛目後ナデ	指オサエ ヨコナデ 工具ナデか	細礫(石英、雲母、白色砂粒)、黒色粒子	暗文 丹塗り	202113 000062
57 第15図	SK57	弥生 土器	高坏	-	〔21.5〕	(25.9)	赤褐 明黄褐	赤褐 橙	ミガキ 工具ナデか ナデ	ミガキ	砂粒(角閃石)	丹塗り シボリ痕	202113 000066
58 第15図	SK57	弥生 土器	甕棺	〔42.6〕	-	(16.8)	浅黄 黒	浅黄 灰黄	ナデ 刷毛目後ナデ消し	ナデ	細砂粒(白色砂粒)、黒色粒子	胴最大径(57.6)cm	202113 000061
59 第15図	SK57	弥生 土器	甕棺	〔39.8〕	-	(19.0)	にぶい黄橙 にぶい赤褐	にぶい橙	ナデ ヨコナデ 刷毛目	ナデ	細砂粒(角閃石)、赤色粒子		202113 000054
60 第15図	SK58	弥生 土器	甕	32.1	-	(16.3)	浅黄橙 にぶい橙	浅黄橙 にぶい橙	ヨコナデ ナデ 刷毛目	ナデ 刷毛目	細礫(雲母)		202113 000071
61 第15図	SK58	弥生 土器	甕	21.0	8.6	16.3～ 17.1	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙 黒褐	ヨコナデ 刷毛目 ナデ	ヨコナデ 刷毛目後ナデ	粗砂粒(雲母)	黒斑	202113 000079
62 第16図	SK58	弥生 土器	甕	35.6	8.0	30.5～ 30.2	赤	にぶい黄橙	ミガキ ナデ	ナデ 指オサエ	細砂粒(雲母、白色砂粒)、黒色粒子	暗文 丹塗り 穿孔(2箇所か)	202113 000080
63 第16図	SK58	弥生 土器	甕	(36.9)	(6.6)	(29.4)	赤 橙	橙	ナデ 刷毛目後ミガキ	刷毛目	細砂粒(白色砂粒)	暗文 丹塗り	202113 000076
64 第16図	SK58	弥生 土器	甕	〔25.5〕	-	(31.2)	浅黄橙 橙	浅黄橙 橙	回転ナデ 刷毛目	刷毛目	細砂粒(雲母、角閃石、白色砂粒)、赤色粒子		202113 000072
65 第16図	SK58	弥生 土器	壺	12.2	6.0	15.7	赤 赤褐	黒 褐灰	ナデ ヨコナデ	ナデ 指オサエ	粗砂粒(角閃石)	暗文 丹塗り 穿孔	202113 000078
66 第16図	SK58	弥生 土器	壺	9.1	5.2	12.6～ 12.3	赤 黒	褐灰 黒	ナデ 刷毛目	ナデ	粗砂粒(雲母、白色砂粒)、黒・赤色粒子	丹塗り	202113 000070
67 第16図	SK58	弥生 土器	鉢	15.6	5.4	8.6	橙 にぶい黄橙	橙	ナデ 刷毛目 指オサエ	ヨコナデ ナデ 指オサエ	粗砂粒(雲母)	黒斑	202113 000081
68 第16図	SK58	弥生 土器	高坏	〔23.8〕	18.3	27.4～ 27.1	にぶい橙 黄橙 黄灰	にぶい黄橙	ヨコナデ 刷毛目 ナデ	ヨコナデ ナデか	細砂粒(雲母)	丹塗りか	202113 000082
69 第17図	SK58	弥生 土器	高坏	〔27.3〕	-	(8.6)	赤褐	明赤褐	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	細砂粒(雲母、角閃石)	暗文 丹塗り シボリ痕	202113 000077
70 第17図	SK58	弥生 土器	高坏	30.5	-	(7.0)	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ ナデか	ヨコナデ	粗砂粒(雲母、角閃石、白色砂粒)、黒色粒子	丹塗り	202113 000069
71 第17図	SK58	石製品	鏃	(2.1)	1.9	0.4	-	-	-	-	黒曜石製	0.98g	202113 000073
72 第17図	SK58	石製品	鏃	(3.0)	1.80	0.4	-	-	-	-	黒曜石製	1.38g	202113 000074
73 第17図	SK58	石製品	鏃	2.1	1.2	0.3	-	-	-	-	黒曜石製	0.43g	202113 000075
74 第17図	SK58	鉄製品	刀子	(10.45)	2.8～ 3.8	0.5	-	-	-	-	-	73.34g	202113 000102
75 第17図	SK58	鉄製品	刀子	(4.4)	2.8～ 3.6	0.4～ 0.45	-	-	-	-	-	22.85g	202113 000103
76 第17図	SK58	鉄製品	板状 鉄斧	(8.35)	5.2～ 6.4	0.1～0.7	-	-	-	-	-	203.6g	202113 000104
77 第17図	SK65	弥生 土器	甕	(25.2)	-	(7.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ナデか	細砂粒(雲母)		202113 000048
78 第17図	SK65	弥生 土器	壺	〔19.0〕	-	(8.8)	浅黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ 工具ナデ後ナデか	精良		202113 000049
79 第17図	SK65	弥生 土器	鉢	-	-	(6.0)	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ナデか	粗砂粒(雲母)		202113 000050
80 第17図	ST45	黒色 土器	埦	14.8	8.5	6.0	黒	黒	ミガキ 回転ヘラケズリ	ミガキ	細砂粒(雲母)	板目	202113 000041
81 第17図	ST45	鉄製品	釘	(2.5)	(1.7)	0.2～0.4	-	-	-	-	-	2.37g 木質	202113 000089
82 第17図	ST45	鉄製品	釘	(3.05)	0.3～ 0.8	0.4	-	-	-	-	-	1.71g 木質	202113 000100
83 第17図	ST45	鉄製品	釘	(3.8)	1.0	0.65～ 1.0	-	-	-	-	-	3.54g	202113 000091
84 第17図	ST45	鉄製品	釘	(4.05)	0.95	0.65	-	-	-	-	-	2.70g 木質	202113 000094
85 第17図	ST45	鉄製品	釘	(3.8)	0.2～ 2.1	0.4～0.6	-	-	-	-	-	3.10g 木質	202113 000096
86 第17図	ST45	鉄製品	釘	4.6	0.35～ 2.2	0.35～ 0.45	-	-	-	-	-	4.63g 木質	202113 000101
87 第17図	ST45	鉄製品	釘	(0.48)	0.3～ 1.3	0.6～0.7	-	-	-	-	-	3.41g 木質	202113 000099
88 第17図	ST45	鉄製品	釘	5.1	0.15～ 1.9	0.6～0.8	-	-	-	-	-	4.08g 木質	202113 000095
89 第17図	ST45	鉄製品	釘	(6.2)	1.05	0.65	-	-	-	-	-	4.26g 木質	202113 000092
90 第17図	ST45	鉄製品	釘	6.2	0.75～ 2.0	0.8	-	-	-	-	-	8.77g 木質	202113 000093

第４表　出土遺物観察表④

遺物 No.	出土 遺構	種別	器種	法量(cm) 口径 長	 底径 幅	 器高 厚	色調 外面	 内面	調整 外面	 内面	胎土	備考	登録 番号
91 第17図	ST45	鉄製品	釘	(5.85)	0.2～ 1.05	0.2～ 0.55	-	-	-	-	-	4.07g 木質	202113 000098
92 第17図	ST45	鉄製品	釘	(5.55)	0.5～ 1.3	0.55	-	-	-	-	-	4.11g 木質	202113 000097
93 第17図	ST45	鉄製品	釘	(5.15)	(1.4)	0.5～1.1	-	-	-	-	-	6.44g 木質	202113 000090
94 第18図	ST47	弥生 土器	甕棺	65.8	12.8	106.0	橙	橙 にぶい橙	ナデ 刷毛目	ナデ 刷毛目	細礫(長石、石英、雲母、角閃石)	胴最大径79.6cm	202113 000105
95 第18図	ST48	弥生 土器	甕棺	〔38.0〕	-	(27.3)	にぶい橙	にぶい橙 にぶい黄橙	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ナデ	粗砂粒(石英、雲母、白色砂粒)、黒･赤色粒子	胴最大径(34.8)cm	202113 000106
96 第18図	ST48	弥生 土器	甕棺	33.0	8.75	31.75	浅黄橙 黄灰	橙	ヨコナデ　刷毛目 ナデ	ヨコナデ　刷毛目 ナデ	細礫(長石、石英、雲母、角閃石)	胴最大径(30.1)cm	202113 000107
97 第18図	ST49	弥生 土器	甕棺	48.3	12.6	80.2	浅黄橙 黒　褐灰	浅黄橙 にぶい橙	ヨコナデ　刷毛目 ナデ	ナデ	粗砂粒(長石、雲母)	胴最大径35.2cm 穿孔　口縁部打欠き	202113 000108
98 第19図	ST50	弥生 土器	甕棺	-	11.0	(30.1)	にぶい黄橙 黒褐	にぶい橙	ヨコナデ　刷毛目 ナデ	刷毛目 ナデ	粗砂粒(長石、雲母、角閃石、白色砂粒)	胴最大径43.4cm 黒斑　胴部打欠き	202113 000109
99 第19図	ST50	弥生 土器	甕棺	48.4	12.6	92.0	浅黄橙 黒　褐灰	浅黄橙 褐灰	ナデ 刷毛目	ナデ	細礫(長石、石英、雲母)	胴最大径35.7cm 黒斑	202113 000110
100 第19図	ST51	弥生 土器	甕棺	-	-	(24.2)	にぶい橙	にぶい橙 にぶい黄橙	ヨコナデ 刷毛目	ナデ	ほぼ精良	胴最大径34.0cm 胴部打欠き	202113 000111
101 第19図	ST51	弥生 土器	甕棺	36.2	11.2	77.4	橙　黒 にぶい橙	橙 にぶい橙	ナデ　刷毛目	ナデ 刷毛目	細砂粒(雲母、角閃石)	胴最大径58.8cm	202113 000112
102 第19図	ST67	弥生 土器	甕棺	31.5	9.5	32.9	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄橙	ヨコナデ　刷毛目 ナデ	ヨコナデ ナデ	粗砂粒(雲母)	胴最大径29.4cm 黒斑	202113 000113
103 第19図	ST67	弥生 土器	甕棺	32.8	10.0	36.7	にぶい橙 黒	にぶい黄橙 黄灰	ヨコナデ　刷毛目 ナデ	ヨコナデ ナデ	粗砂粒(雲母)	胴最大径31.3cm 黒斑	202113 000114
104 第19図	ST72	弥生 土器	甕棺	-	11.4	(47.5)	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄橙	ヨコナデ　刷毛目 ナデ	ナデ	礫(石英、白色砂粒)	胴最大径(58.3)cm 穿孔　黒斑	202113 000115
105 第20図	ST74	弥生 土器	甕館	34.5	9.6	37.9	にがい橙 橙	橙 明橙	ヨコナデ　刷毛目 ナデ	ナデ	粗砂粒(角閃石)	胴最大径33.5cm 黒斑	202113 000116
106 第20図	ST74	弥生 土器	甕棺	35.4	8.7	39.9	にぶい赤褐 橙　浅黄橙	浅黄橙 にぶい橙	ヨコナデ　刷毛目 ナデ	ヨコナデ 刷毛目後ナデ消し	細礫(長石、石英、雲母、角閃石)	胴最大径34.4cm	202113 000117
107 第20図	ST75	弥生 土器	甕棺	33.8	8.5	33.5～ 34.5	にぶい橙 黒	にぶい橙 褐灰	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ナデ	礫(雲母、白色砂粒)	胴最大径30.3cm 黒斑	202113 000009
108 第20図	ST75	弥生 土器	甕館	43.4	11.7	87.0	橙　褐灰 にぶい橙	にぶい橙 褐灰	ナデ 刷毛目	ナデ	細礫(長石、石英、雲母、角閃石)	胴最大径33.5cm 黒斑	202113 000012
109 図版16	東区 北東	縄文 土器	鉢	-	-	(3.95)	橙	橙	ナデ	ナデ	細砂粒(滑石)	沈線	202113 000020
110 図版16	東区 北東	縄文 土器	鉢	-	-	(4.15)	橙	橙	ナデ	ナデ	粗砂粒(滑石)	沈線	202113 000021

Ⅳ. 総括

本調査では、溝３条、土坑13基、土壙墓２基、木棺墓１基、石蓋土壙墓１基、甕棺墓９基を検出した。隣地の試掘確認調査の結果から予想されたとおり、弥生時代の墳墓をはじめとした良好な資料を得ることができた。以下、時代順に整理・概観し総括としたい。

出土した資料の中で最も古く位置づけられるものは、縄文時代前期の曽畑式土器である。採取資料であり遺構に伴うものではないが、久留米市西部では高三潴遺跡第7次調査地点で出土例があるのみで希少な資料である。本遺跡と同じ微高地上に立地する田川中原遺跡では、晩期の粗製深鉢が出土しており、周辺で同時代の遺構が検出される可能性もあり、今後調査の進展が期待される。

弥生時代の遺構は土坑10基、土壙墓1基、石蓋土壙墓1基、甕棺墓9基である。土坑は中期後半を主体とし、SK65は後期初頭に下る可能性がある。また、SK76については破片資料が2点出土したのみで判断が難しいが、周辺状況から中期後半の所産と思われる。土坑の中では丹塗り土器が出土したSK53・54・57・58が特筆され、後述する墳墓に関わる祭祀土坑と考えられる。

墳墓のうち、土壙墓ST52は甕棺と墓域を同じくすることから中期後半以降、石蓋土壙墓ST66

は重複関係から中期後半の所産と推定される。甕棺墓は、土坑と同じく中期後半を主体としており、ST51が中期末、ST47が後期初頭である(1)。これらの墳墓は、西区南西隅で密集して検出された。ST51・66・75の重複関係から少なくとも3期に亘ると考えられ、方位にはST67・75を除き統一性がみられない。祭祀土坑との関係については、久留米市山川神代所在の安国寺甕棺墓群の調査に詳しくこれを参考にすると(2)、祭祀土坑1基に対して3基前後の墳墓を対象とした家族墓的規模の祭祀が行われたと推定される。

墳墓の中で注目されるのは中期後半のST49で、甕棺と石棺との折衷形態をとる。同様の遺構は、市内では後期初頭の大城中筒井遺跡6号甕棺（北野町）があり、詳細不明ながら三明寺（田主丸町）でも発見例がある。この他、中期後半の鷹取五反田遺跡6号甕棺（うきは市）、中期中葉に比定されている栗山遺跡31号甕棺（朝倉市）が挙げられる(3)。これらには敷石や甕棺の打欠きの有無などの相違点に加え時期差も認められるが、大きくは同一形態の墓制と思われ、筑後川流域に広がっていた可能性もある。

古墳時代の遺構は未検出であるが、古代については溝2条、土坑1基、木棺墓1基を検出した。各遺構の時期は、SD4が7世紀末から8世紀前半、SD42が7世紀後半であり、SK3が8世紀前半、ST45が10世紀である。SD4は、断面形状の特徴や周辺で関連遺構と断定できるものを検出できていないため、給排水や区画を意図したものとは考え難い。特殊遺物はないが、石組の構築物があったと推定されることからも別の用途を考える必要がある。

最後に、出土遺物に恵まれなかった溝1条、土坑2基、土壙墓1基のうち、SD36は方位から考えるとSD4と同時期の可能性が残るが、断定し難い。SK56は須恵器の甕細片が出土しているが、詳細な時期は不明と言わざるを得ない。これに後出するSK55も同様である。最後にST44は、弥生時代の墳墓群とは一定の距離をおいて検出されていることから関連性は希薄であり、古墳時代以後に設けられたものであろう。

第５表　弥生時代墳墓一覧表

遺構番号	墳墓形態	時期	重複関係		主軸方位	傾斜角	合口形式	備考
			先出遺構	後出遺構				
ST 47	－　×　大形棺	後期初頭	－	－	N － 63° － E	45°	不明	
ST 48	小形棺　×　小形棺	中期後半	－	ST49	N － 67° － W	59°	接口	
ST 49	大形棺　×　石棺	中期後半	ST48	－	N － 17° － W	0°	－	甕棺打欠き
ST 50	小形棺　×　大形棺	中期後半	－	－	N － ±0°	56°	接口	上甕打欠き
ST 51	小形棺　×　大形棺	中期末	ST66	－	N － 87° － W	64°	不明	上甕打欠き
ST 52	土壙墓	中期後半以降	SK76	－	N － 19° － W	－	－	
ST 66	石蓋土壙墓	中期後半	ST75	ST51・67	N － 83° － E	－	－	
ST 67	小形棺　×　小形棺	中期後半	ST66	－	N － 73° － E	63°	接口	
ST 72	－　×　大形棺	中期後半	－	－	N － 15° － E	39°	不明	
ST 74	小形棺　×　小形棺	中期後半	－	－	N － 43° － E	40°	接口	
ST 75	小形棺　×　大形棺	中期後半	－	ST66	N － 73° － E	17°	接口	

(1) 橋口達也『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣. 2005　(2) 久留米市教育委員会「東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書」第2集. 1983　(3) 北野町教育委員会「大城中筒井遺跡」2003 / 田主丸町教育委員会「田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書」1999 / 福岡県教育委員会「鷹取五反田遺跡Ⅰ」1998 / 甘木市教育委員会「栗山遺跡」1982　※(2)(3)のシリーズ名は省略。

写　真　図　版

図版1

（1）調査地より高三潴地区を望む（東上空から）

（2）東区全景（北東上空から）

（1）西区全景（南東上空から）

（2）ＳＤ４礫群検出状況（北から）

（3）ＳＤ４完掘状況（北から）

（4）ＳＤ36完掘状況（南東から）

（5）ＳＤ42完掘状況（南から）

図版３

（１） ＳＫ１完掘状況（南西から）

（２） ＳＫ 46 完掘状況（南東から）

（３） ＳＫ 53 完掘状況（北東から）

（４） ＳＫ 54 完掘状況（北から）

（５） ＳＫ 57 遺物出土状況（南西から）

（６） ＳＫ 57 完掘状況（東から）

（７） ＳＫ 58 遺物出土状況（東から）

（８） ＳＫ 58 完掘状況（北から）

（１） ＳＫ 76 完掘状況（北から）

（２） ＳＴ 44 完掘状況（南から）

（３） ＳＴ 52 完掘状況（北から）

（４） ＳＴ 45 遺物出土状況（北西から）

（５） ＳＴ 45 完掘状況（南西から）

（６） ＳＴ 66 石蓋検出状況（北東から）

（７） ＳＴ 66 完掘状況（南東から）

（８） ＳＴ 66 赤色物検出状況（東から）

図版５

（１） ＳＴ 47 甕棺検出状況（西から）

（２） ＳＴ 48・49 甕棺検出状況（南東から）

（３） ＳＴ 49 石棺検出状況（南から）

（４） ＳＴ 50・67 甕棺検出状況（東から）

（５） ＳＴ 51 甕棺検出状況（北西から）

（６） ＳＴ 72 甕棺検出状況（北西から）

（７） ＳＴ 74 甕棺検出状況（北西から）

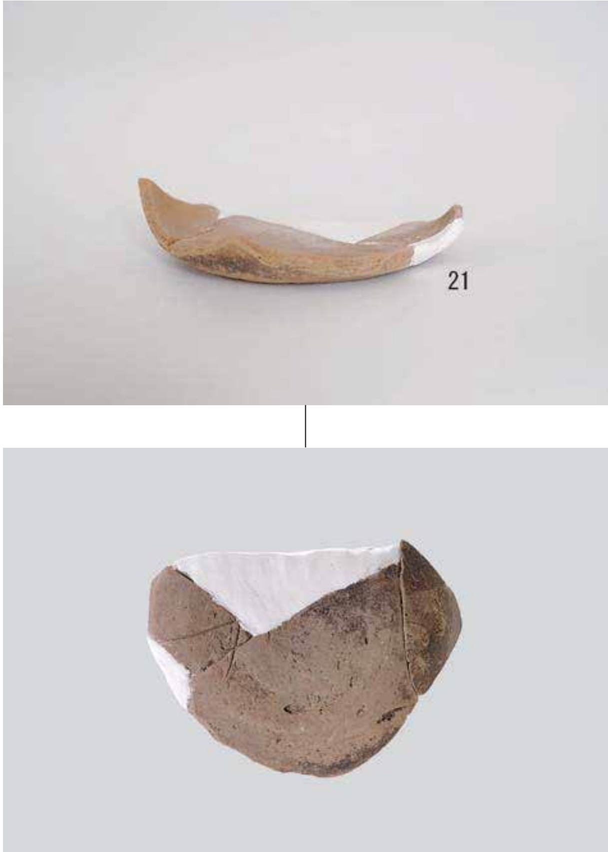
（８） ＳＴ 75 甕棺検出状況（南東から）

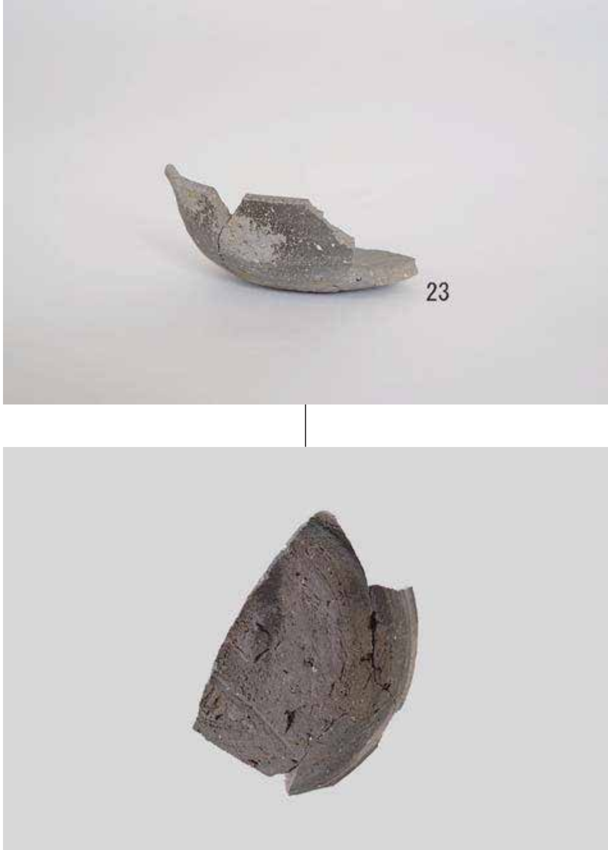
出土遺物①

図版７

出土遺物②

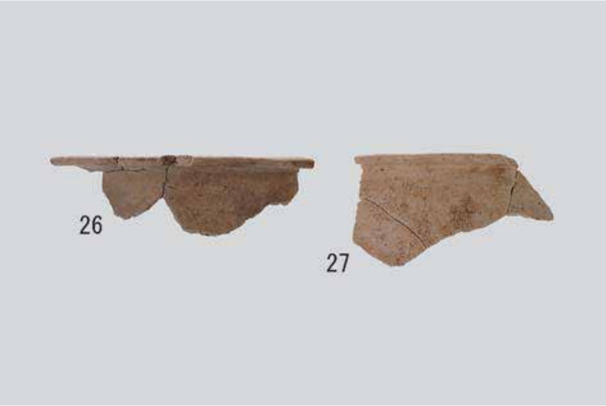
図版８





出土遺物③

図版９



出土遺物④

出土遺物⑤

図版 11

出土遺物⑥

62

63

64

65

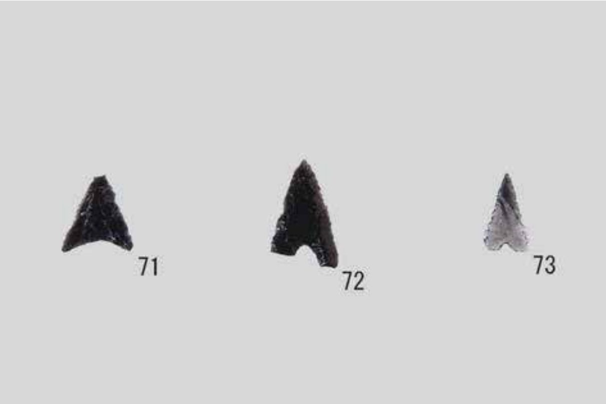
66

67

68

出土遺物⑦

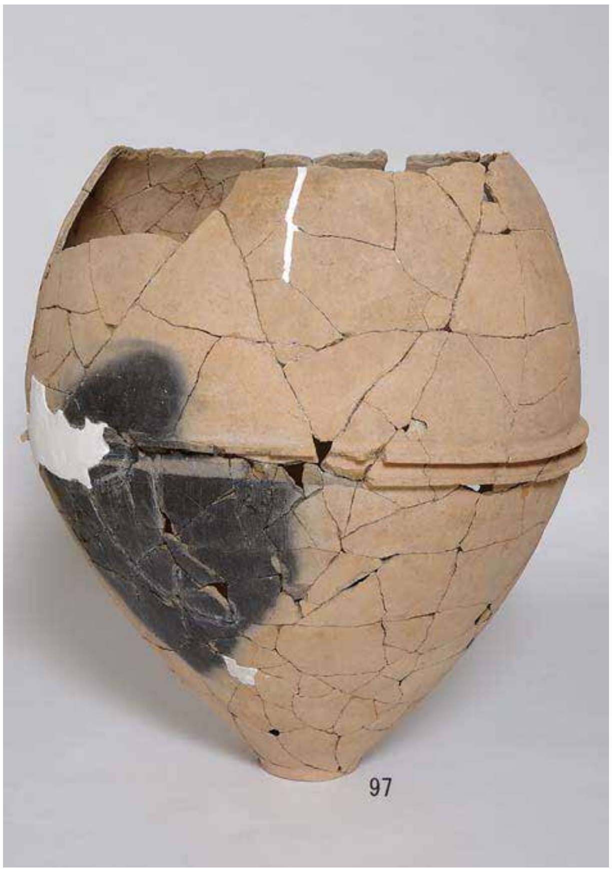
図版 13



出土遺物⑧

出土遺物⑨

図版 15


97

99

100

101

101

102

出土遺物⑩

103

104

105

106

107

108

109　110

出土遺物⑪

報告書抄録

ふりがな	はやつざきごたんだいせき だいいちじ はっくつちょうさほうこく
書　　名	早津崎五反田遺跡第１次発掘調査報告
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第445集
編著者名	廣木　誠
編集機関	久留米市　市民文化部　文化財保護課
所　在　地	〒830-8520　福岡県久留米市城南町15-3　Tel:0942-30-9225　Fax:0942-30-9714 Email:bunkazai@city.kurume.lg.jp
発行年月日	2023（令和5）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はやつざきごたんだいせき 早津崎五反田遺跡 第1次調査	くるめしみづままちはやつ 久留米市三潴町早津 ざきあざごたんだ　ばん ほか 崎字五反田1006番1外	40203	－	33° 15′ 50″	130° 28′ 11″	20211101 ～ 20220117	1,200㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
早津崎五反田遺跡 第1次調査	墓地	弥生 古代	溝 土坑 土壙墓 木棺墓 石蓋土壙墓 甕棺墓	3条 13基 2基 1基 1基 9基	弥生土器、土師器、黒色土器、須恵器、石製品、鉄製品	弥生時代中期後半から後期初頭にかけての墳墓および祭祀土坑を検出するとともに、甕棺と石棺の折衷形態をとる墳墓を確認した。当該期の墓制・祭祀行為を考察する上で良好な資料を得た。

要　約

調査地は三潴町のほぼ中央に位置する標高約9ｍの微高地上に立地する。本調査は、隣地で確認された弥生時代等の遺構の分布状況を確認することを目的に実施した。結果、弥生時代の墳墓・祭祀土坑を中心とした良好な資料を得ることができた。弥生時代の墳墓は甕棺墓9基を主として、土壙墓1基、石蓋土壙墓1基を確認し、中期後半から後期初頭の所産である。これらの墓域に接して同時期の祭祀土坑を検出し、家族墓的規模の祭祀が行われたと推定される。また、墳墓の中には甕棺と石棺の折衷形態を採用したものが出土しており、当時の墓制を考察する上で注目される。この他、久留米市西部では希少な縄文時代前期の曽畑式土器を採取するとともに、三潴町内で初となる古代の遺構を確認できた。

土木工事の届出日	令和3年8月31日	遺物の発見通知日	令和4年1月24日 （3文財第2757号）

早津崎五反田遺跡

－ 第１次発掘調査報告 －

久留米市文化財調査報告書　第445集

令和５年３月31日

発　行　久留米市教育委員会

編　集　久留米市 市民文化部 文化財保護課

印　刷　香和印刷株式会社